

令和5年度

上川農業試験場年報

令和6年10月

地方独立行政法人北海道立総合研究機構 農業研究本部

上川農業試験場

目 次

I 概 要	1
1. 沿 革	1
2. 施設及び試験圃場	1
3. 機 構	2
4. 職員の配置	3
5. 職 員	3
1) 現在員	3
2) 転入者	3
3) 転出者及び退職者	4
6. 支出決算額	4
7. 新たに設置した主要施設及び備品	4
II 作 況	5
1. 気象概況	5
2. 作 況	7
1) 各作物の耕種概要	7
2) 各作物の作況	7
(1) 水 稻	7
(2) 秋まき小麦	9
(3) 春まき小麦	10
(4) 大 豆	11
(5) 小 豆	12
(6) ばれいしょ	13
III 試験研究及び地域支援活動	14
1. 各グループの試験研究成果及び地域支援活動等の概要	14
1) 水稻畑作グループ	14
2) 生産技術グループ	14
2. 各グループの試験研究課題	15
1) 水稻畑作グループ	15
2) 生産技術グループ	17
3. 地域支援活動	18
1) 地域農業技術支援会議	19
2) 道北地域農業技術センター連絡協議会 (NATEC)	19
3) 上川水稻直播ネットワーク	19

IV	試験研究の成果と普及	20
1.	技術普及に移された成果	20
1)	普及奨励事項	20
2)	普及推進事項	20
3)	指導参考事項	20
4)	研究参考事項および行政参考事項	20
2.	論文ならびに資料	20
1)	研究論文、試験成績	20
2)	口頭・ポスター発表	20
3)	専門雑誌、著書・資料	21
4)	新聞等記事	22
5)	印刷刊行物	22
3.	研修生の受入	22
1)	普及指導員研修	22
2)	学校教育研修・職場体験学習	22
3)	JICA 研修	23
4)	その他	23
4.	技術相談及び技術指導	23
1)	技術相談	23
2)	技術指導	24
5.	講師等の派遣	26
6.	関連委員会・学会研究会役員	26
V	広報・場運営・その他	27
1.	広 報	27
1)	一般参観来場者	27
2)	公開デー	27
3)	新技術発表会	27
4)	マスコミ等への対応	27
5)	イベント等への出展	28
2.	場運営	28
1)	場内委員会	28
2)	諸会議	28
3)	職員の研修	29
4)	表彰および学位授与	30
3.	自己点検への対応	31

I 概 要

1. 沿革

当時は、明治19年に旧神居村忠別（現旭川市神居1条1丁目）に忠別農作試験所として発足し農作物栽培の適否を試みたのを始めとする。この試験所は、翌年上川仮道路開削に従事する樺戸集治監忠別出張所に引き継がれた。明治22年道庁は屯田兵及び移住民に蚕桑の業を授け、かたわら農作物を試作する忠別農作試験所（現旭川市1条2、3丁目）を復活した。明治30年に旭川村6条11丁目（現旭川東高校敷地）に、さらに明治37年には旭川の市街拡張のため永山村（現旭川市永山6条18丁目）に移転し、平成5年度末までの90年間にわたって各種の試験を行った。翌平成6年度からは現在地（上川郡比布町南1線5号）の新庁舎、新圃場での試験を開始した。

長い歴史の間に名称や機構も変遷し、昭和25年には農業試験研究機関の整備統合で、従来の試験研究が国立と道立に二分されたのに伴い、当時は道費支弁の北海道農業試験場上川支場となり、さらに昭和39年11月、本道の農畜一体とした試験研究を行うため機構改革が実施され、当時は北海道立上川農業試験場と改称された。

試験業務については、従来の蚕桑中心の試験から明治27年には一般畑作の試験に移り、さらに明治33年からは水稻も取り上げられるようになった。明治37年永山村に移転してからは水稻に関する試験が多くなり、それらの成果は広く普及された。大正4年からは水稻の本格的品種改良試験が開始された。その結果、大正時代には「坊主」系統が広く栽培され、昭和10年に有名な「富国」ができるまで「坊主」の時代が続いた。その後、戦前戦後を通じ数多くの優良品種を育成し、名実ともに当時は本道水稻作に関する中心的試験機関となった。

なお、昭和2年より昭和21年まで地方債事業として、農林省指定による水稻新品種育成試験を実施し、その後、昭和22年より25年まで札幌農事改良実験所上川試験地が併置されていた。昭和41年には農林省の全額助成による水稻指定試験が再度設置され、昭和44年には普及事業の強化にともない専門技術員が配置された。

一方、北海道立農業試験場原々種の生産事業が士

別村東山で昭和29年から始められ、昭和31年に女満別分場の廃止と同時に北海道立農業試験場原々種農場士別分場が発足した。昭和33年には北海道立農業試験場上川支場畑作科が併置され、畑作試験に着手した。昭和34年に北海道原々種農場士別分場を廃止すると共に、北海道立上川農業試験場畑作科と改称した。昭和62年には、農業試験研究機関の機構改正により園芸部門を強化し畑作園芸科と改称し、平成4年度からは畑作科と園芸科に分離し一層の強化を図った。その後、平成5年度末の本庁舎移転に伴い士別市の畑作科、園芸科も現在地に統合された。

本庁舎の比布町への移転整備経過は、平成元年9月に現在地への移転が決定され、平成3年度に圃場整備、平成4年度に庁舎及び付属施設建設工事に着手し、平成6年8月末に外構工事を含め完成した。

平成18年度の機構改正により天北農業試験場は廃止の上、上川農業試験場天北支場とされた。

平成22年4月には地方独立行政法人北海道立総合研究機構が発足し、22の道立試験研究機関が移行して、当時は農業研究本部上川農業試験場となった。この機構再編ではグループ制が導入され、水稻、生産環境、地域技術の3グループが設置されたほか、道職員である農業改良普及員は道農政部生産振興局技術普及課に所属の上、上川農試駐在という形となり、技術普及室が置かれた。

平成30年7月、根釧農業試験場の酪農試験場への改称に伴い、天北支場は酪農試験場天北支場となった。

令和2年4月、機構再編により生産環境と地域技術の両グループが統合され、生産技術グループとなった。

令和5年4月、水稻グループが生産技術グループの畑作に係る業務の移管にともない水稻畑作グループと改称された。

2. 施設及び試験圃場

1) 位置と土壤条件

当時は、上川郡比布町の基線（国道40号線）と町道南1線、町道5号と6号に囲まれた面積約28.5

ha の方形の用地で、その標高は 160m 前後である。中央には用地を東西に二分する形でウツペツ工場川が流れており、東方約 700m には石狩川がある。分布する土壌は褐色低地土で、一部は礫層が地表下 30～60 cm に現れる礫質褐色低地土である。試験圃場造成前の土地利用は水田、宅地、農道等であった。

試験圃場造成に当たり、農道は殆どそのままの位置で新しい農道を造成した。試験圃場は、表土部分を取り除き、水田は心土均平を、畑圃場は心土部分の厚さ 30 cm の石礫除去を行った後、表土戻しをした。

造成された試験圃場の代表的な土壌条件は、水田では細粒褐色低地土・造成相、また畑圃場は礫質褐色低地土・造成相である。

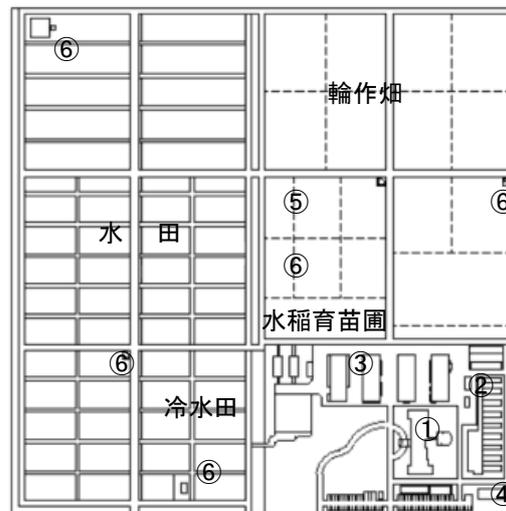
2) 施設、圃場の利用区分と面積

施設	(㎡)
庁舎	2,804
吹抜小屋	214
車庫	179
バイオテクノロジー研究棟	2,147
人工気象棟・ガラス網室	459
給油所	3
昆虫飼育実験棟	282
参観者便所	27
共同作業棟	916
共同調査棟	907
冷水田ポンプ舎	63
水田ポンプ舎	20
畑かんポンプ舎	11
農機具庫	907
外便所(2)	72
研究資材棟	907
乾燥庫	214
その他	279
施設合計	10,411

試験圃場	(ha)
水田関係	14.05
水田	9.99
(内冷水田)	1.05
農道・畦畔	2.85
用排水路	0.29
施設・用地など	0.92
畑関係	9.52
畑	7.81
農道	1.13
枠試験地	0.19
堆肥場	0.20
施設・用地など	0.15
排水路	0.04
建物敷地	4.83
用地合計	28.40

3) 土地利用及び施設・圃場の配置

(土地利用・施設・圃場の配置図)



- ① 庁舎
- ② 温室・人工気象室
- ③ 調査・作業棟
- ④ 昆虫飼育実験棟
- ⑤ 精密枠試験圃
- ⑥ 圃場内施設

3. 機構

総務課：予算・給与・財務、理事長印・文書の管理、自動車及び施設等の使用・管理に関することを行う。その他各グループの主管に属さないことを行う。

研究部

水稻畑作グループ：水稻の品種育成、畑作物に関する試験研究・調査、除草剤の試験、研究及び調査を行う。作業計画、労務及び業務用諸施設の管理を行う。

生産技術グループ：水稻の栽培及び品質、土壌肥料および土壌環境、病害虫及び園芸作物、に関する試験、研究及び調査を行う。地域農業技術の支援、農業研究情報の提供と専門技術の調査研究、開発された技術の体系化と普及定着、に関することを行う。

4. 職員の配置 (令和6年3月31日現在)

	法人職員	道派遣	再雇用	計	備 考
場 長	1			1	
研 究 部 長	1			1	
総 務 課 長		5		5	
水 稲 畑 作 G	1 0		1	1 0	
生 産 技 術 G	1 2		2	1 2	
合 計	2 4	5	2	2 9	再雇用は内数

5. 職 員

1) 現在員 (令和6年3月31日現在)

職 名	氏 名	職 名	氏 名
場 長	吉 村 康 弘	研 究 主 幹	後 藤 英 次
研 究 部 長	谷 藤 健	主 査 (栽 培 環 境)	唐 星 児
総 務 課 長	森 光 治	主 任 主 査 (病 虫)	長 濱 恵
主 査 (総 務)	伊 東 良 浩	主 任 主 査 (地 域 支 援)	内 田 哲 嗣
主 査 (調 整)	兼 山 幸 記	研 究 主 査	野 田 智 昭
技 師	有 村 優 季	研 究 主 任	栢 森 美 如
技 師	本 田 愛 花	研 究 主 任	齋 藤 優 介
研 究 主 幹	尾 崎 洋 人	研 究 主 任	古 山 真 一
主 査 (水 稻)	木 下 雅 文	研 究 職 員	佐 々 木 大 介
主 査 (畑 作)	藤 田 涼 平	研 究 職 員	竹 内 悠 真
研 究 主 任	粕 谷 雅 志	専 門 研 究 員 (再 任 用)	古 川 勝 弘
研 究 主 任	森 田 耕 一	専 門 研 究 員 (再 任 用)	中 村 隆 一
研 究 主 任	堀 川 謙 太 郎		
研 究 職 員	佐 々 木 瞭 太		
専 門 主 任	中 川 諭		
主 任	檜 村 優		
主 任	笹 木 正 志		

2) 転入者

職 名	氏 名	発今年月日	備 考
研 究 部 長	谷 藤 健	R5. 4. 1	中央農業試験場から
総 務 課 長	森 光 治	〃	北見農業試験場から
技 師	有 村 優 季	〃	北海道後志総合振興局から
主 査 (畑 作)	藤 田 涼 平	〃	北見農業試験場から
研 究 職 員	佐 々 木 瞭 太	〃	新規採用
研 究 主 査	野 田 智 昭	〃	花・野菜技術センターから
研 究 職 員	竹 内 悠 真	〃	新規採用

3) 転出者及び退職者

職 名	氏 名	発令年月日	備 考
研 究 部 長	竹 内 晴 信	R5. 4. 1	中央農業試験場へ(再雇用)
研 究 主 任	平 山 裕 治	〃	中央農業試験場へ
研 究 主 任	熊 谷 聡	〃	中央農業試験場へ
総 務 課 長	徳 光 恵 理	R5. 3. 31	退職
主 査 (畑 作 園 芸)	高 濱 雅 幹	〃	退職

6. 支出決算額

(単位：円)

科 目	当初予算額	最終予算額	決 算 額	残 額
戦 略 研 究 費	1,900,000	1,900,000	1,900,000	0
重 点 研 究 費	1,885,000	1,885,000	1,885,000	0
職 員 研 究 奨 励 費	1,000,000	1,000,000	1,000,000	0
経 常 研 究 費	11,955,000	11,955,000	11,419,423	535,577
研 究 開 発 推 進 費	0	0	0	0
技 術 普 及 指 導 費	222,000	256,200	256,200	0
研 究 用 備 品 整 備 費	0	3,921,500	3,921,500	0
維 持 管 理 経 費 (研 究)	725,000	725,000	587,048	137,952
維 持 管 理 経 費 (一 般)	50,555,000	49,955,000	42,960,145	6,994,855
知 的 財 産 経 費	0	0	0	0
運 営 経 費	28,219,000	28,538,450	27,114,889	1,423,561
共 同 研 究 費	1,700,000	1,900,000	1,900,000	0
国 庫 受 託 研 究 費	1,330,000	1,280,000	1,280,000	0
道 受 託 研 究 費	4,260,000	4,787,000	4,786,834	166
そ の 他 受 託 研 究 費	23,496,000	27,549,509	27,549,509	0
施 設 整 備 費 補 助 金	0	49,863,000	49,863,000	0
施 設 整 備 費 (積 立 金)	0	29,370,000	29,370,000	0

7. 新たに設置した主要施設及び備品

品 名	形 式	数 量	金 額 (円)
運搬車	筑水キャニコム下町小町 (J81DPS)	1 台	1,028,500
粉碎機	レッチェ カッティングミルSM-100	1 式	2,893,000
アツタ式トレーラー	(株)遠藤企画T3031型	1 台	581,570
バーチカルハロー	松山(株)ニプロFGR2500C-2L	1 台	1,678,600
耕耘ロータリー	松山(株)ニプロSX2020-3S	1 台	570,570

Ⅱ 作 況

1. 気象概況

《令和4年（2022年）》

11月：平均気温は1.6℃高く、降水量は平年の81%、日照時間は平年の124%であった。

12月：平均気温は0.1℃高く、降水量は平年の65%、日照時間は平年の93%であった。

《令和5年（2023年）》

1月：平均気温は1.2℃低く、降水量は平年の84%、日照時間は平年の96%であった。

2月：平均気温は0.9℃低く、降水量は平年の74%、日照時間は平年の106%であった。

3月：平均気温は2.6℃高く、降水量は平年の95%、日照時間は平年の102%であった。

4月：平均気温は1.6℃高く、降水量は平年の198%、日照時間は平年の70%であった。

5月：平均気温は0.1℃高く、降水量は平年の51%、日照時間は平年の113%であった。

6月：平均気温は1.6℃高く、降水量は平年の157%、日照時間は平年の105%であった。

7月：平均気温は0.5℃高く、降水量は平年の95%、日照時間は平年の82%であった。

8月：平均気温は2.9℃高く、降水量は平年の79%、日照時間は平年の106%であった。

9月：平均気温は2.5℃高く、降水量は平年の136%、日照時間は平年の92%であった。

10月：平均気温は0.8℃高く、降水量は平年の137%、日照時間は平年の110%であった。

本年の根雪終は3月30日で平年より10日早く、積雪期間は平年より18日短く、耕鋤始（融雪剤散布圃場）は4月25日で平年より7日遅かった（表1）。令和4年11月から令和5年10月までの気象は表2のとおりである。

以上、農耕期間の4～10月についてまとめると、平均気温は5月、7月が平年並で、4月、6月、8月、9月、10月がそれぞれ1.6℃、1.6℃、2.9℃、2.5℃、0.8℃平年より高く、平年を下回る月はなかった。降水量は7月が平年並で、4月、6月、9月、10月が平年136～198%と多く、5月、8月が平年の51～79%と少なかった。日照時間は6月が平年並で、5月、8月、10月が平年の106～113%と多く、4月、7月、9月が70～92%であった。5～9月までの積算値は、平年に比べて平均気温が233℃高く、降水量が2mm多く、日照時間が3時間多かった（表3）

表1 季節表

	初霜 (前年)	降雪始 (前年)	根雪始 (前年)	根雪終 (月日)	積雪期間 (日)	降雪終 (月日)	耕鋤始 (月日)	晩霜 (月日)	初霜 (月日)	降雪始 (月日)
本年	10月13日	11月3日	11月30日	3月30日	121	4月24日	4月25日	未観測	10月24日	10月21日
平年	10月9日	10月27日	11月22日	4月9日	139	4月23日	4月18日	5月13日	10月9日	10月26日
比較	4	7	8	△10	△18	1	7	—	15	△5

注1) 本年は2022～2023年の値。

2) 根雪始、根雪終、積雪期間、耕鋤始は比布圃場の観測値。平年は過去10か年の平均値。

3) 初霜、降雪始、降雪終、晩霜は旭川地方気象台による旭川市の観測値。晩霜は2020年から観測中止。

4) 初霜、降雪始、降雪終の平年は過去10か年の平均値。晩霜の平年は2011～2020年の平均値。

5) △印は平年に比べて早または短であることを示す。

表2 気象表 (旬別)

年月	旬	平均気温 (°C)			最高気温 (°C)			最低気温 (°C)			降水量 (mm)			降水日数 (日)			日照時間 (hrs)		
		本年	平年	比較	本年	平年	比較	本年	平年	比較	本年	平年	比較	本年	平年	比較	本年	平年	比較
2022年 11月	上旬	4.6	5.1	▲0.5	8.9	9.3	▲0.4	-0.2	1.2	▲1.4	15.0	35.6	▲20.6	7.0	5.9	1.1	27.3	22.6	4.7
	中旬	3.0	1.7	1.3	7.5	5.6	1.9	-1.3	-1.9	0.6	33.0	38.0	▲5.0	5.0	6.5	▲1.5	31.5	19.5	12.0
	下旬	2.7	-1.3	4.0	6.8	2.1	4.7	-0.5	-5.0	4.5	36.5	30.6	5.9	7.0	7.2	▲0.2	15.2	17.4	▲2.2
平均または合計		3.4	1.8	1.6	7.7	5.7	2.1	-0.7	-1.9	1.2	84.5	104.2	▲19.7	19.0	19.6	▲0.6	74.0	59.5	14.5
12月	上旬	-4.2	-2.9	▲1.3	-1.6	0.2	▲1.8	-7.7	-6.8	▲0.9	15.0	31.0	▲16.0	9.0	6.7	2.3	16.1	14.6	1.5
	中旬	-6.3	-4.5	▲1.8	-3.0	-1.2	▲1.8	-9.9	-9.1	▲0.8	18.0	22.5	▲4.5	8.0	6.9	1.1	14.2	15.2	▲1.0
	下旬	-3.1	-6.6	3.5	0.1	-3.2	3.3	-7.2	-11.2	4.0	17.0	23.8	▲6.8	5.0	8.5	▲3.5	12.6	16.4	▲3.8
平均または合計		-4.5	-4.7	0.1	-1.5	-1.4	▲0.1	-8.3	-9.0	0.8	50.0	77.3	▲27.3	22.0	22.1	▲0.1	42.9	46.2	▲3.3
2023年 1月	上旬	-9.3	-8.0	▲1.3	-5.4	-4.3	▲1.1	-14.6	-13.2	▲1.4	23.0	17.9	5.1	8.0	5.9	2.1	22.7	17.3	5.4
	中旬	-7.9	-8.8	0.9	-2.8	-4.7	1.9	-14.9	-14.2	▲0.7	3.0	12.5	▲9.5	3.0	4.0	▲1.0	22.1	25.0	▲2.9
	下旬	-11.3	-8.1	▲3.2	-7.3	-3.7	▲3.6	-16.8	-13.8	▲3.0	10.5	13.1	▲2.6	6.0	5.5	0.5	25.7	31.4	▲5.7
平均または合計		-9.5	-8.3	▲1.2	-5.2	-4.2	▲0.9	-15.4	-13.7	▲1.7	36.5	43.5	▲7.0	17.0	15.4	1.6	70.5	73.7	▲3.2
2月	上旬	-8.8	-8.9	0.1	-4.4	-4.2	▲0.2	-14.7	-14.9	0.2	11.0	11.2	▲0.2	6.0	4.6	1.4	24.4	29.6	▲5.2
	中旬	-7.4	-5.8	▲1.6	-2.0	-1.8	▲0.2	-14.6	-10.7	▲3.9	11.5	16.6	▲5.1	6.0	5.0	1.0	33.3	30.0	3.3
	下旬	-7.2	-6.0	▲1.2	-0.8	-1.1	0.3	-16.5	-12.1	▲4.4	6.0	10.7	▲4.7	3.0	3.9	▲0.9	39.0	31.4	7.6
平均または合計		-7.8	-6.9	▲0.9	-2.4	-2.4	▲0.0	-15.3	-12.6	▲2.7	28.5	38.5	▲10.0	15.0	13.5	1.5	96.7	91.0	5.7
3月	上旬	-0.5	-3.5	3.0	4.3	1.1	3.2	-6.6	-9.3	2.7	14.0	19.5	▲5.5	5.0	0.0	0.0	38.7	37.0	1.7
	中旬	0.6	-1.2	1.8	6.0	3.5	2.5	-5.5	-7.0	1.5	6.5	14.5	▲8.0	3.0	4.0	▲1.0	34.9	46.6	▲11.7
	下旬	3.5	0.4	3.1	9.8	5.7	4.1	-2.5	-5.2	2.7	23.5	12.3	11.2	3.0	4.4	▲1.4	73.6	61.1	12.5
平均または合計		1.2	-1.4	2.6	6.7	3.4	3.3	-4.9	-7.2	2.3	44.0	46.3	▲2.3	11.0	13.4	▲2.4	147.2	144.7	2.5
4月	上旬	5.9	2.6	3.3	11.6	7.5	4.1	0.4	-2.6	3.0	21.5	16.8	4.7	2.0	4.0	▲2.0	43.9	56.0	▲12.1
	中旬	6.1	4.6	1.5	11.4	10.5	0.9	0.3	-1.1	1.4	24.0	14.6	9.4	2.0	4.1	▲2.1	43.6	61.0	▲17.4
	下旬	7.7	7.6	0.1	12.2	14.2	▲2.0	3.4	0.8	2.6	38.5	11.0	27.5	6.0	3.4	2.6	41.9	69.0	▲27.1
平均または合計		6.6	4.9	1.6	11.7	10.7	1.0	1.4	-1.0	2.3	84.0	42.4	41.6	10.0	11.5	▲1.5	129.4	186.0	▲56.6
5月	上旬	10.2	9.8	0.4	16.5	16.0	0.5	3.5	3.8	▲0.3	12.5	26.6	▲14.1	3.0	4.6	▲1.6	62.4	54.5	7.9
	中旬	13.8	12.5	1.3	20.5	18.8	1.7	7.2	6.5	0.7	0.5	23.0	▲22.5	1.0	3.6	▲2.6	82.1	65.7	16.4
	下旬	13.5	15.0	▲1.5	19.6	21.3	▲1.7	7.7	9.1	▲1.4	25.5	25.3	0.2	6.0	4.3	1.7	77.9	76.5	1.4
平均または合計		12.5	12.4	0.1	18.9	18.7	0.2	6.1	6.5	▲0.3	38.5	74.9	▲36.4	10.0	12.5	▲2.5	222.4	196.7	25.7
6月	上旬	15.3	15.4	▲0.1	20.9	21.7	▲0.8	10.1	9.8	0.3	43.5	18.5	25.0	8.0	3.3	4.7	44.6	68.0	▲23.4
	中旬	18.4	16.8	1.6	24.0	22.3	1.7	13.6	12.1	1.5	5.0	34.4	▲29.4	2.0	4.6	▲2.6	64.6	53.8	10.8
	下旬	21.0	17.6	3.4	28.6	23.0	5.6	14.7	13.0	1.7	80.0	29.2	50.8	3.0	4.0	▲1.0	74.5	53.5	21.0
平均または合計		18.2	16.6	1.6	24.5	22.3	2.2	12.8	11.6	1.2	128.5	82.1	46.4	13.0	11.9	1.1	183.7	175.3	8.4
7月	上旬	20.6	20.1	0.5	26.7	25.7	1.0	15.4	15.4	0.0	7.5	47.2	▲39.7	3.0	3.6	▲0.6	74.4	58.9	15.5
	中旬	21.0	21.5	▲0.5	26.0	27.5	▲1.5	17.7	16.7	1.0	75.5	23.6	51.9	6.0	3.6	2.4	29.5	66.4	▲36.9
	下旬	24.3	22.7	1.6	29.5	28.5	1.0	19.9	18.0	1.9	37.0	55.5	▲18.5	4.0	3.4	0.6	56.8	70.3	▲13.5
平均または合計		22.0	21.4	0.5	27.4	27.2	0.2	17.7	16.7	1.0	120.0	126.3	▲6.3	13.0	10.6	2.4	160.7	195.6	▲34.9
8月	上旬	22.1	22.3	▲0.2	26.8	28.2	▲1.4	18.1	17.6	0.5	139.0	70.3	68.7	7.0	3.8	3.2	26.5	60.7	▲34.2
	中旬	23.4	20.5	2.9	29.7	25.7	4.0	18.8	16.4	2.4	10.0	74.2	▲64.2	3.0	5.3	▲2.3	73.8	46.1	27.7
	下旬	25.0	19.1	5.9	31.5	24.8	6.7	20.1	14.5	5.6	3.0	49.0	▲46.0	2.0	5.6	▲3.6	71.7	54.8	16.9
平均または合計		23.5	20.6	2.9	29.3	26.2	3.1	19.0	16.2	2.8	152.0	193.5	▲41.5	12.0	14.7	▲2.7	172.0	161.6	10.4
9月	上旬	21.4	18.6	2.8	28.0	24.6	3.4	15.7	13.4	2.3	16.0	32.0	▲16.0	4.0	4.0	0.0	66.0	56.7	9.3
	中旬	19.5	15.3	4.2	25.4	21.3	4.1	14.7	10.0	4.7	115.5	47.8	67.7	7.0	4.3	2.7	31.1	46.8	▲15.7
	下旬	14.3	13.8	0.5	21.0	20.4	0.6	8.9	8.1	0.8	18.5	30.4	▲11.9	3.0	3.9	▲0.9	49.9	55.8	▲5.9
平均または合計		18.4	15.9	2.5	24.8	22.1	2.7	13.1	10.5	2.6	150.0	110.2	39.8	14.0	12.2	1.8	147.0	159.3	▲12.3
10月	上旬	11.3	11.5	▲0.2	17.1	17.0	0.1	7.2	6.5	0.7	67.0	43.4	23.6	5.0	5.2	▲0.2	38.6	41.2	▲2.6
	中旬	9.3	8.2	1.1	16.1	13.8	2.3	3.8	3.1	0.7	66.0	35.0	31.0	4.0	5.7	▲1.7	50.7	41.8	8.9
	下旬	7.7	6.2	1.5	13.4	11.7	1.7	2.8	1.6	1.2	28.5	39.3	▲10.8	6.0	5.5	0.5	47.4	40.9	6.5
平均または合計		9.4	8.6	0.8	15.5	14.2	1.4	4.6	3.7	0.9	161.5	117.7	43.8	15.0	16.4	▲1.4	136.7	123.9	12.8

注1) 比布アメダス観測値。平年は過去10ヶ年の平均値。
 2) ▲印は平年に比べて低または減を示す。

表3 農耕期間積算値 (5月～9月)

期間	項目	平均気温 (°C)	降水量 (mm)	降水日数 (日)	日照時間 (hr)
5月上旬	本年	2,899	589	62	886
	平年	2,666	587	62	889
9月下旬	比較	233	2	0	▲3

注1) 比布アメダス観測値。平年は過去10ヶ年の平均値。
 2) ▲印は平年に比べて低または減を示す。

2. 作 況

1) 各作物の耕種概要

各作物の耕種概要は下記の通りである。

表4 畑作物の耕種概要

作物名	前作物	畦幅 (cm)	株間 (cm)	1株 本数 (本)	播種 粒数 (粒/m ²)	株数 (株/10a)	施肥量 (kg/10a)				
							N	P ₂ O ₅	K ₂ O	MgO	堆肥
秋まき小麦	大豆	30	—	—	255	—	4.0+6.0+4.0	10.0	6.0	2.5	—
春まき小麦	ソルガム	30	—	—	340	—	9.0	16.2	10.8	4.5	—
大豆	ばれいしょ	60	20	2	—	8333	1.8	13.2	9.0	4.2	—
小豆	とうもろこし	60	20	2	—	8333	3.0	12.0	7.0	2.5	—
ばれいしょ	大豆	75	30	—	—	4444	7.5	15.0	10.5	3.8	—

注1) 前作物欄において、ばれいしょ以外は緑肥としての作付

2) 秋まき小麦のN施肥量は、基肥+起生期+止葉期

2) 各作物の作況

(1) 水 稲： 平年並

播種は平年より2日早い4月14日に行った。出芽の揃いは良好であった。移植は平年より1日早い5月19日に行った。移植時の草丈は平年より0.8~1.2cm長く、第1葉鞘高は並から0.2cm長かった。葉数と茎数はほぼ平年並であった。苗100本当たりの地上部乾物重は平年より0.35~0.48g重かったが、苗の充実度を示す地上部乾物重/草丈は平年並であった。

移植後の5月下旬の気温はやや低く推移し、生育は停滞した。その後の気温は6月上旬が平年並、6月中旬が平年よりやや高く推移し、生育は概ね回復した。6月20日時点の草丈は平年より6.0~7.6cm高かったが、m²当たりの茎数は4~13%少なく、主稈葉数は0.1~0.2枚多かった。

6月下旬の平均気温は平年より高く、日照時間も長かったことから、生育は進んだ。幼穂形成期は平年より2日、止葉期は4~5日、出穂期は5~6日それぞれ早かった。穂揃いは良好であった。茎数は平年並から4%少なく、出穂が早まったため草丈は平年より5.9~8.5cm長く、主稈の止葉葉数は0.1~0.4枚少なかった。

7月下旬以降の平均気温は平年並からやや高く経過した。稈長は平年より「ななつぼし」で1.5cm短

く、「ゆめぴりか」で2.0cm長く、穂長は並から

0.7cm長かった。m²当たり穂数は5~7%少なかった。

8月下旬の平均気温はかなり高く、登熟期間の平均気温は高く推移したため、成熟期は平年より9日早く、登熟日数は3~4日短かった。「ゆめぴりか」で倒伏が一部発生した。稈実歩合は平年より1.7~2.7ポイント高かった。一穂粒数は「ななつぼし」が4.8%少なく「ゆめぴりか」が5.3%多く、m²当たり稈実粒数は「ななつぼし」が7.1%少なく「ゆめぴりか」が平年並であった。登熟歩合は平年より1.5~3.7ポイント高かった。

精粒重は「ななつぼし」と「ゆめぴりか」で各々平年比97%、101%であった。屑米歩合は平年より「ななつぼし」が0.8ポイント低く、「ゆめぴりか」が0.7ポイント高く、精玄米千粒重は「ななつぼし」が0.5g重く、「ゆめぴりか」が平年並であった。精玄米重は「ななつぼし」が679kg/10a、「ゆめぴりか」が645kg/10aで、各々平年比99%と102%であった。玄米の検査等級は「ななつぼし」が1等で平年よりやや優り、「ゆめぴりか」が2等中で平年並であった。

これらのことから、本年の作況は「平年並」である。

表5 水稻の生育および収量

品種名		ななつぼし			ゆめぴりか			
項目 / 年次		本年	平年	比較	本年	平年	比較	
生育期節	播種期 (月.日)	4.14	4.16	△ 2	4.14	4.16	△ 2	
	移植期 (月.日)	5.19	5.20	△ 1	5.19	5.20	△ 1	
	幼穂形成期 (月.日)	6.21	6.23	△ 2	6.22	6.24	△ 2	
	止葉期 (月.日)	7.07	7.11	△ 4	7.07	7.12	△ 5	
	出穂期 (月.日)	7.16	7.21	△ 5	7.15	7.21	△ 6	
	成熟期 (月.日)	8.29	9.07	△ 9	8.30	9.08	△ 9	
	穂揃日数 (日)	6	8	△ 2	7	8	△ 1	
	登熟日数 (日)	44	48	△ 4	46	49	△ 3	
	生育日数 (日)	137	144	△ 7	138	145	△ 7	
移植時	草丈 (cm)	14.7	13.5	1.2	14.4	13.6	0.8	
	葉数 (枚)	4.2	4.1	0.1	4.3	4.2	0.1	
	茎数 (本)	2.0	1.9	0.1	2.0	2.0	0.0	
	第1葉鞘高 (cm)	2.6	2.4	0.2	2.4	2.4	0.0	
	地上部乾物重 (g/100本)	4.88	4.40	0.48	4.78	4.43	0.35	
	地上部乾物重/草丈	0.33	0.32	0.01	0.33	0.33	0.00	
本田生育	葉数 (枚)	6月20日	8.2	8.0	0.2	8.4	8.3	0.1
		7月20日	10.0	10.1	▲ 0.1	10.2	10.6	▲ 0.4
		止葉葉数	10.0	10.1	▲ 0.1	10.2	10.6	▲ 0.4
	茎数 (本/m ²)	6月20日	467	535	▲ 68	573	597	▲ 24
		7月20日	726	723	3	820	853	▲ 33
	草丈 (cm)	6月20日	45.3	39.3	6.0	44.2	36.6	7.6
7月20日		88.3	82.4	5.9	89.7	81.2	8.5	
成熟期	稈長 (cm)	68.2	69.7	▲ 1.5	68.0	66.0	2.0	
	穂長 (cm)	16.7	16.7	0.0	17.4	16.7	0.7	
	穂数 (本/m ²)	650	682	▲ 32	741	799	▲ 58	
収量構成要素	一穂粒数 (粒)	49.4	51.9	▲ 2.5	45.6	43.3	2.3	
	m ² 当たり粒数 (×千)	32.1	35.3	▲ 3.2	33.8	34.6	▲ 0.8	
	稔実歩合 (%)	96.6	94.9	1.7	94.7	92.0	2.7	
	m ² 当たり稔実粒数 (×千)	31.0	33.4	▲ 2.4	32.0	31.7	0.3	
	同上比 (%)	93	100	▲ 7	101	100	1	
	登熟歩合 (%)	90.3	86.6	3.7	84.4	82.9	1.5	
	籾摺歩合 (%)	82.0	80.3	1.7	78.6	78.3	0.3	
	屑米歩合 (%)	1.6	2.4	▲ 0.8	4.5	3.8	0.7	
精玄米千粒重 (g)	22.8	22.3	0.5	22.7	22.7	▲ 0.0		
収量	藁重 (kg/10a)	626	656	▲ 30	606	632	▲ 26	
	精籾重 (kg/10a)	824	852	▲ 28	816	806	10	
	精玄米重 (kg/10a)	679	688	▲ 9	645	634	12	
	収量平年比 (%)	99	100	▲ 1	102	100	2	
	検査等級 (等)	1	1下	—	2中	2中	—	

注1) 平年値は前7か年中、令和元年（最凶年）、平成29年（最豊年）を除く5か年の平均値。

2) △は平年より“早”、▲は平年より“減”を示す。

3) 育苗耕種概要 育苗様式：成苗ポット苗

施肥：成苗培土Hを約1.43 (kg/箱) 充填、
成分量 N 0.5、P₂O₅ 1.0、K₂O 0.8、MgO 0.2 (g/箱)、
置床 N 25.0、P₂O₅ 0.0、K₂O 10.0 (g/m²)

4) 本田耕種概要 栽植密度：25.3株/m² (33.0cm×12.0cm)、3本植

施肥量：N 8.0、P₂O₅ 9.7、K₂O 6.9 (kg/10a)、堆肥 1000 (kg/10a)

5) 精玄米千粒重および精玄米重：網目1.90mm以上、水分15%換算。

(2) 秋まき小麦：良

播種は平年より1日早い9月15日に行った。出芽期は平年より2日早い9月24日であった。越冬前の葉数はやや多く、草丈は平年並で、茎数は平年より多かった。

根雪始は平年より8日遅く、根雪終は平年より10日早く、積雪期間は平年より18日短い121日であった。雪腐病発病度は平年より低く、越冬茎歩合は高かった。越冬後の草丈は平年より長く、茎数は平年より多かった。

根雪終が早く、また4、5月の気温が平年並からやや高く推移したことから、出穂期は平年より4日早

い5月31日となった。草丈は平年より長く、茎数は平年より多かった。

その後6月中旬から下旬の気象が高温多照で経過したため、成熟期は平年より4日早い7月11日となった。なお、6月29日および7月11日の豪雨により試験区の一部が倒伏した。成熟期の稈長は平年より長く、穂長は平年並で、穂数は多かった。

子実重は781kg/10a（平年比152%）で平年を上回った。容積重、千粒重および原粒蛋白含有率は平年より低かった。検査等級は1等であった。

したがって、本年の作況は「良」である。

表6 秋まき小麦の生育および収量

品 種 名		きたほなみ		
項 目 / 年 次		本 年	平 年	比 較
播種期 (月・日)		9.15	9.16	△ 1
出芽期 (月・日)		9.24	9.26	△ 2
出穂期 (月・日)		5.31	6.04	△ 4
成熟期 (月・日)		7.11	7.16	△ 5
越冬茎歩合 (%)		119.5	106.7	12.8
雪腐病発病度		13.8	17.3	▲ 3.5
葉数(枚)	令 4年10月20日	4.6	4.3	0.3
草丈 (cm)	令 4年10月20日	18.2	18.0	0.2
	令 5年 5月20日	55.9	42.7	13.2
	令 5年 6月20日	98.4	88.4	10.0
茎数 (本/m ²)	令 4年10月20日	741	633	108
	令 5年 5月20日	1232	916	316
	令 5年 6月20日	802	562	240
成熟期	稈長 (cm)	90	78	12
	穂長 (cm)	8.5	8.6	▲ 0.1
	穂数 (本/m ²)	751	452	299
子実重 (kg/10a)		781	515	266
同上平年比 (%)		152	100	52
容積重 (g/L)		787	842	▲ 55
千粒重 (g)		39.8	42.5	▲ 2.7
蛋白質含有率 (%)		8.5	9.2	▲ 0.7
検査等級 (等)		1	1	—

注1) 平年値は前7か年中、収穫年における平成28年（最豊年）、平成30年（最凶年）を除く5か年の平均値。

2) △は平年より“早”、▲は平年より“減”を示す。

(3) 春まき小麦：やや良

播種は平年より2日遅い4月20日に行った。播種後の遅れを反映して出芽期も平年より2日遅かった。5月中旬および6月中旬が高温・乾燥で推移した影響を受け、出穂期は平年より1日早かった。5月中旬および6月中下旬の高温・乾燥により、草丈はやや短く推移し、稈長は平年より短く、穂長もやや短かったが、穂数は平年を上回った。成熟期は平年より3

日早かったが、出穂期も1日早かったことから登熟期間はほぼ平年並であった。

穂数が多かったことから子実重は平年比116%と多収であり、蛋白質含有率は平年並であったが、千粒重は平年を大きく下回り、容積重もやや軽かった。検査等級は平年並の1等であった。

したがって、本年の作況は「やや良」である。

表7 春まき小麦の生育および収量

品 種 名		春よ恋		
項 目 / 年 次		本 年	平 年	比 較
播種期 (月.日)		4.20	4.18	2
出芽期 (月.日)		5.03	5.01	2
出穂期 (月.日)		6.17	6.18	△ 1
成熟期 (月.日)		7.25	7.28	△ 3
草丈 (cm)	5月20日	19.8	22.5	▲ 2.7
	6月20日	75.7	82.0	▲ 6.3
茎数 (本/m ²)	5月20日	579	671	▲ 92
	6月20日	792	735	57
成熟期	稈長 (cm)	82	97	▲ 15
	穂長 (cm)	7.8	8.4	▲ 0.6
	穂数 (本/m ²)	603	503	100
子実重 (kg/10a)		521	448	73
同上平年比 (%)		116	100	16
容積重 (g/L)		799	826	▲ 27
千粒重 (g)		35.0	39.3	▲ 4.3
蛋白質含有率 (%)		11.5	11.7	▲ 0.2
検査等級 (等)		1	1	—

注1) 平年値は前7か年中、平成28年（最豊年）、令和3年（最凶年）を除く5か年の平均値。

2) △は平年より“早”、▲は平年より“減”を示す。

(4) 大豆：良

播種は、平年より1日早い5月18日に行った。播種後に適度な降雨があったことから出芽期は平年より2日早い5月30日となった。主茎長は平年より長く、主茎節数は平年並であった。

6月中旬から下旬の気象が高温多照で経過したことから、開花期は平年より6日早い7月7日となった。開花期の主茎長は平年に比べ長く、主茎節数は平年並で、分枝数は多かった。なお、6月29日および7月11日の豪雨により試験区の一部が倒伏した。

開花期が平年より早かったこと、8月下旬から9月上旬の気温が高温で推移したことから、成熟期は平年より9日早い9月8日となった。成熟期の主茎長は平年よりやや長く、主茎節数および分子数は平年並で、着莢数は多かった。

子実重は459kg/10aで平年比115%と多かった。百粒重は30.8gと平年より軽く、屑粒率は0.9%と平年よりやや少なかった。検査等級は2等上であった。

したがって、本年の作況は「良」である。

表8 大豆の生育および収量

品 種 名		ユキホマレ		
項 目 / 年 次		本年	平年	比較
播種期 (月.日)		5.18	5.19	△ 1
出芽期 (月.日)		5.30	6.01	△ 2
開花期 (月.日)		7.07	7.13	△ 6
成熟期 (月.日)		9.08	9.17	△ 9
主茎長 (cm)	6月20日	17.4	13.0	4.4
	7月20日	62.3	54.7	7.6
	8月20日	63.4	59.1	4.3
	9月20日	61.3	58.3	3.0
	成熟期	61.3	58.3	3.0
主茎節数 (節)	6月20日	3.9	3.7	0.2
	7月20日	10.0	9.6	0.4
	8月20日	10.4	10.2	0.2
	9月20日	10.3	10.2	0.1
	成熟期	10.3	10.2	0.1
分枝数 (本/株)	7月20日	7.4	5.6	1.8
	8月20日	7.5	6.4	1.1
	9月20日	6.3	6.1	0.2
	成熟期	6.3	6.1	0.2
着莢数 (個/株)	8月20日	93	84	9
	9月20日	107	77	30
	成熟期	107	77	30
子実重 (kg/10a)		459	400	59
同上平年比 (%)		115	100	15
百粒重 (g)		30.8	33.6	▲ 2.8
屑粒率 (%)		0.9	1.4	▲ 0.5
検査等級 (等)		2上	2中	—

注1) 平年値は前7か年中、平成29年（最豊年）、令和3年（最凶年）を除く5か年の平均値。

2) △は平年より“早”、▲は平年より“減”を示す。

(5) 小豆：不良

播種は平年より2日遅い5月25日に行った。播種の遅れを反映して出芽期も2日遅く、開花期も平年より1日遅かったが、8月中下旬の著しい高温により成熟期は11日早かった。

生育期間中は土壌水分が確保されたことから主茎長および本葉数は平年をやや上回って推移し、最終

的には全面倒伏したものの、主茎長は平年より長く、主茎節数、分枝数および着莢数は平年並であった。しかしながら、登熟期間が短く百粒重が平年より軽かったことから、子実重は平年比83%と低収であった。なお、屑粒率は平年並で、検査等級も平年並の2等中であった。

したがって、本年の作況は「不良」である。

表9 小豆の生育および収量

品 種 名		エリモシヨウズ		
項 目 / 年 次		本年	平年	比較
播種期 (月.日)		5.25	5.23	2
出芽期 (月.日)		6.11	6.09	2
開花期 (月.日)		7.25	7.24	1
成熟期 (月.日)		9.03	9.14	△ 11
主茎長 (cm)	6月20日	5.0	4.4	0.6
	7月20日	30.6	24.0	6.6
	8月20日	67.4	61.8	5.6
	成熟期	76	69	7.0
本葉数 (枚)	6月20日	1.0	0.7	0.3
	7月20日	8.7	7.5	1.2
	8月20日	13.2	12.5	0.7
主茎節数 (節)	成熟期	13.5	13.5	0.0
分枝数 (本/株)	7月20日	5.6	5.4	0.2
	8月20日	5.9	6.0	▲ 0.1
	成熟期	5.9	6.2	▲ 0.3
着莢数 (個/株)	8月20日	61	58	3
	成熟期	52	54	▲ 2
子実重 (kg/10a)		291	350	▲ 59
同上平年比 (%)		83	100	▲ 17
百粒重 (g)		11.4	14.2	▲ 2.8
屑粒率 (%)		4.1	4.1	0
検査等級 (等)		2中	2中	—

注1) 平年値は前7か年中、平成29年（最豊年）、令和3年（最凶年）を除く5か年の平均値。

2) △は平年より“早”、▲は平年より“減”を示す。

(6) ばれいしょ：やや不良

植え付けは平年より1日早い5月9日に行った。萌芽期は平年と同日であり、開花期は平年より2日早い程度であったが、6月中下旬の高温・乾燥の影響を受け、茎長は平年より短かった。その後、7月上旬から8月上旬にかけての圃場の過湿および8月中旬の高温・乾燥により、枯ちょう期は平年より7日早

かった。

上いも数はやや多かったが、塊茎肥大が劣り上いもの平均重が軽かったため、規格内いも重は平年比92%であり、7月中旬から8月上旬の日照時間が少なかったことからでん粉価も低かった。

したがって、本年の作況は「やや不良」である。

表10 ばれいしょの生育および収量

品 種 名		男爵薯		
項 目 / 年 次		本 年	平 年	比 較
植付期 (月.日)		5.09	5.10	△ 1
萌芽期 (月.日)		5.28	5.28	0
開花始 (月.日)		6.21	6.23	△ 2
枯凋期 (月.日)		8.20	8.27	△ 7
茎長 (cm)	6月20日	31.8	32.7	▲ 0.9
	7月20日	40.9	47.1	▲ 6.2
上いも数 (個/株)	7月20日	9.6	8.7	0.9
	8月20日	11.4	10.2	1.2
上いもの 平均重 (g)	7月20日	64	76	▲ 12
	8月20日	84	101	▲ 17
上いも収量 (kg/10a)	7月20日	2733	2901	▲ 168
	8月20日	4254	4517	▲ 263
でん粉価 (%)	7月20日	12.9	14.5	▲ 1.6
	8月20日	13.9	15.2	▲ 1.3
収 穫 期	上いも数 (個/株)	11.4	10.2	1.2
	上いもの平均重 (g)	84	106	▲ 22
	上いも収量 (kg/10a)	4254	4748	▲ 494
	同上平年比 (%)	90	100	▲ 10
	中以上いも収量 (kg/10a)	3606	4273	▲ 667
	同上平年比 (%)	84	100	▲ 16
	規格内いも収量 (kg/10a)	3606	3906	▲ 300
	同上平年比 (%)	92	100	▲ 8
でん粉価 (%)	13.9	14.8	▲ 0.9	

注1) 平年値は前7か年中、平成28年（最豊年）、平成30年（最凶年）を除く5か年の平均値。

2) △は平年より“早”、▲は平年より“減”を示す。

Ⅲ 試験研究及び地域支援活動

1. 各グループの試験研究成果及び地域支援活動等の概要

1) 水稲畑作グループ

水稲育種部門では、育種試験を担当して極良食味品種および良質糯品種の開発を行っている。

優良品種決定基本調査1年目で、対照品種を「ななつぼし」「きたくりん」として供試した「上育487号」は、「ななつぼし」に比べ、出穂期は同等で、成熟期は3日遅く、いもち病抵抗性がかなり優り、割粃が少ない。「きたくりん」に比べ、出穂期は同等で、成熟期は1日遅い。両品種に比べ、粒厚が厚く大粒で多収、タンパク質含有率が低い。耐倒伏性は対照品種並で改善していない。「ななつぼし」に比べ玄米品質が劣ることが大きな欠点であり、試験中止とする。

同じく基本調査1年目で、対照品種を「ふっくりんこ」「きたくりん」として供試した「上育488号」は、「ふっくりんこ」に比べ、出穂期は1日、成熟期は2日遅く、いもち病抵抗性がかなり優る。「きたくりん」に比べ、出穂期は3日、成熟期は5日遅い。両品種に比べ、多収で耐倒伏性に優れタンパク質含有率が低い。玄米品質は「きたくりん」に優るが、「ふっくりんこ」並である。「ふっくりんこ」置き換えとしては、玄米品質が改善していない点で不十分であり、「きたくりん」に対しては、熟期が遅く割粃が多いため全面置き換えは難しい。これらのことから、試験中止とする。

優良品種決定現地調査1年目で、対照品種を「ふっくりんこ」として供試した「上育485号」は、「ふっくりんこ」と比べ、出穂期は2日早く、成熟期は並、多収でタンパク質含有率が低い。耐冷性は対照品種と同等。いもち病圃場抵抗性も優る。玄米品質と炊飯米の外観が優れ、食味総合評価も良好な結果が得られている。「ふっくりんこ」置き換への現地要望を満たすため、次年度は引き続き、現地試験に供試することとした。

また、「上育489号」を新配付系統として選抜した。「上育489号」は「ふっくりんこ」「きたくりん」対照で、収量性に優り、いもち病抵抗性は「き

たくりん」並で「ふっくりんこ」に優る。玄米品質は「ふっくりんこ」にやや優り「きたくりん」に優る。食味は外観の白さ、つや、柔らかさが両品種に優り、総合は「ふっくりんこ」にやや優り、「きたくりん」に優る。

畑作部門では、有望系統の上川地域における適応性の評価を行っている。令和5年度において、北海道優良品種認定に至った供試系統はなかった。

2) 生産技術グループ

水稲の栽培技術開発、環境保全・土壌肥料に関する試験研究、病害虫に関する試験研究、新農業資材試験、発生予察事業、畑作物および園芸作物に関する優良品種決定試験や栽培法の試験ならびに地域支援活動を担当している。

栽培環境部門では「水稲「えみまる」の湛水直播栽培における窒素施肥技術」と「水稲「そらきらり（空育195号）」の栽培管理指標」の成果をとりまとめ、成績会議で指導参考事項となった。また、他農試と連携して「環境保全型有機質資源施用基準の設定調査」、「農地管理実態調査」を、農研機構と連携して「寒冷・積雪地域等の水田における温室効果ガス削減に資する栽培管理の方法等に関する調査」を実施した。

病虫部門では「アスパラガスの枠板式高畝栽培システムの開発」や「きゅうりのホモプシス根腐病に対する化学農薬を用いない防除対策」を行い、「病害虫発生予察調査」では、水稲、小麦の病害虫、ヤガ類・コナガ・マメシクイガについて調査を行った。また、「農作物病害虫診断試験」では、担当管内の作物に発生した病害虫、生育不良等の原因について調査を行った。

園芸部門では、重点研究「持続可能な施設園芸のための環境制御技術の高度化」について道南農試、花・野菜技術センター、北方建築総合研究所、工業試験場と共にオフグリッドの環境制御システムの開発などを行った。戦略研究において冬期無加温栽培した新規野菜ボーレコールの栽培法を開発し、流通・実需評価を行った。

地域支援活動は、地域農業技術支援会議として地域要望課題の収集を行うとともに、普及センターの

支援要請や部会活動などに対して支援を行った。

2. 各グループの試験研究課題

1) 水稲畑作グループ

A 水稲品種開発

(1) 水稲品種開発事業Ⅱ (令和2～6年)

多様なニーズに対応し、北海道稲作の発展に貢献する、省力栽培が可能な品種、耐冷・耐病性が優れる高品質・極良食味、高品質糯品種、並びに収量性を向上させた業務・加工用水稲品種の早期育成を目指す。

(2) 「日本一の米どころ北海道」の実現へ向けた水稲新品種の開発促進 1. 極良食味で耐病虫性の強い多収品種の開発へ向けた選抜強化 (令和2～6年)

他産地に先駆けた先進的な取り組みが可能となる品種の育成へ向け、中後期世代の選抜を強化する。

(3) 多様なニーズに対応する米品種並びに栽培技術早期確立(第Ⅳ期) 1. 極多収スタンダード品種および直播栽培用多収品種の開発強化 (令和元～5年)

(中央農試水田農業グループが実施主体)

初期世代において、収量性、耐病性、耐冷性等の選抜を強化し、極多収で農業特性や業務用炊飯適性に優れた系統、および直播適性を備えた早生で多収な系統の開発を促進する。

(4) 多様なニーズに対応する米品種並びに栽培技術早期確立(第Ⅳ期) 2. 多収で品質・食味の安定したプレミアムおよびミドル品種の開発強化 (令和元～5年)

水稲の初期世代の選抜強化により、耐冷性、耐病性が向上し、品質・食味の高位安定した品種を開発する。

(5) 多様なニーズに対応する米品種並びに栽培技術早期確立(第Ⅳ期) 3. 極多収品種の育成に向けた多収要因の解明と素材開発 (令和元～5年)

現行品種より20%以上多収な各用途向け水稲極多収品種の開発を加速化させるため、収量性に関連する基礎的情報を収集し、極多収素材の開発を行う。水稲有望系統の多収性を評価し、栽培特性として整理する。

(6) 「ダントツ日本一」の産地を目指す北海道もち米品種の開発促進 (令和4～8年)

既存品種より10%以上多収、耐冷性“強”、葉いもち抵抗性“やや強”以上を目標にもち米品種の開発を促進させる。

(7) 酒造好適米の特性分析による品質選抜強化と醸造適性の早期評価 (令和2～5年)

新たな酒米品種開発にむけた有望系統の道北地域における地域適応性を明らかにする。

(8) 「ゆめぴりか」のブランド力強化に向けた戻し交配による形質改良系統の育成 (令和2～6年)

「ゆめぴりか」のブランド力強化のため、「ゆめぴりか」として販売できる形質が改善された従属品種の開発に向け、戻し交配と蒔培養によりタンパク質含有率が0.3～0.5ポイント低下し、穂いもち圃場抵抗性を1ランク以上向上させるなど「ゆめぴりか」の欠点を改良した系統を育成する。

B 水稲優良品種決定試験

(9) 優決 水稲(優決基本相当)

(昭和29年～継続)

育成された有望系統について、生産力その他諸特性を調査し、当地における適応性を検討する

(10) 優決 水稲(優決現地相当)

(昭和29年～継続)

育成された有望系統について、生産力その他諸特性を調査し、現地における適応性を検討する。

C 新優良品種普及促進

(11) 水稲新優良品種普及促進事業

(昭和42年～継続)

新品種の速やかな普及を図るために有望系統の種子の増殖を行う。

D 水稲農業資材試験

(12) 水稲除草剤及び水稲生育調節剤の実用化試験

(昭和45年～継続)

直播用剤3点について、実用化試験を行う。

E 畑作物品種開発(麦類)

(13) 畑作物の地域適応性検定試験(秋まき小麦・春まき小麦、優決基本相当)

(昭和29・34年～継続)

北農研センター育成秋まき小麦有望系統(北海番号)および北見農試育成秋まき・春まき小麦有望系統(北見・北見春番号)について、生産力その他諸

特性を調査し、上川地域における適応性を検討する。

(14) 春まき小麦の品種選定試験 1. 適応性試験 (優決基本相当)、3. 特性検定試験 (4) 栽培特性 (初冬まき) (令和3~7年)

ホクレン農総研育成春まき小麦有望系統 (HW番号) について、生産力その他諸特性を調査し、上川地域における適応性を検討するとともに、初冬まき適性を評価する。

(15) 二条大麦の品種選定試験 1. 適応性検定基本試験 (優決基本相当) (令和3~5年)

サッポロビール(株)育成二条(ビール)大麦有望系統(札育番号)について、生産力その他諸特性を調査し、上川地域における適応性を検討する。

(16) 畑作物の地域適応性検定試験 (秋まき小麦・春まき小麦、優決現地相当)

(平成15年・平成13年~継続)

北農研センター育成秋まき小麦有望系統(北海番号)、北見農試育成秋まき・春まき小麦有望系統(北見番号)、ホクレン農総研育成春まき小麦有望系統(HW系統)について、現地試験による上川地域への適応性を検定する(令和5年は北海番号の供試系統なし)。

(17) 優決 麦類 (秋まき小麦・二条大麦、優決現地相当) (昭和33年~継続)

北農研センター育成秋まき小麦有望系統(北海番号)、北見農試育成秋まき小麦有望系統、サッポロビール(株)育成二条大麦有望系統(札育番号)について、現地試験による上川地域への適応性を検討する(令和5年は北海番号の供試系統なし)。

(18) 気象変動に対応した高品質で安定生産可能な道産小麦の開発促進 (第3期) 2) 地域の生産および品質安定に向けた障害・病害抵抗性と収量性の選抜強化 (3) 耐雪性の選抜強化①雪腐褐色小粒菌核病抵抗性の検定強化・③春まき小麦の初冬まき栽培特性検定、(6) 地域の気象条件に対応した系統の選抜強化②上川地域への適応性の評価 (系適相当) ア) 春まき小麦・イ) 秋まき小麦

(令和4~6年)

雪腐病抵抗性検定強化では、北農研センターおよび北見農試育成秋まき小麦のF4・小生予1年目・小生予2年目以降系統および有望系統(北系・北見番号)の発病程度を調査し、これを基に算出した発病度の基準品種との比較により抵抗性を判定する。初冬まき栽培では、北見農試育成春まき小麦有望系

統(北見春番号)の初冬まき適性を評価する。適応性の評価では、北農研センター育成秋まき小麦有望系統(勝系番号)および北見農試育成秋まき・春まき小麦有望系統(北系・北系春番号)について、生産力その他諸特性を調査し、上川地域における適応性を検討する。

(19) 小麦育種研究に係る系統適応性・特性検定試験 (令和5年)

北農研センター育成秋まき小麦有望系統(勝系番号)について、生産力その他諸特性を調査し、上川地域における適応性を検討するとともに、有望系統(北海・勝系番号)について、雪腐病抵抗性を判定する。

F 畑作物品種開発 (豆類)

(20) 畑作物の地域適応性検定試験 (大豆、優決基本相当) (平成26年~継続)

十勝農試育成有望系統(十育番号)について、生産力その他諸特性を調査し、上川地域における適応性を検討する。

(21) 畑作物の地域適応性検定試験 (小豆、優決基本相当) (昭和34年~継続)

十勝農試育成有望系統(十育番号)について、生産力その他諸特性を調査し、上川地域における適応性を検討する。

(22) 優決 大豆 (大豆、優決現地相当)

(昭和33年~継続)

十勝農試育成有望系統(十育番号)について、現地試験による上川地域への適応性を検討する(令和5年は供試系統なし)。

(23) 優決 小豆 (小豆、優決現地相当)

(昭和34年~継続)

十勝農試育成有望系統(十育番号)について、現地試験による上川地域への適応性を検討する。

(24) 優決 菜豆 (菜豆、優決現地相当)

(昭和38年)

十勝農試育成有望系統(十育番号)について、現地試験による上川地域への適応性を検討する(令和5年は供試系統なし)。

(25) 道央地域で安定生産できる中晩生小豆品種の開発強化 (令和5~7年)

十勝農試育成の系統選抜(F5~F6)・小生予(F6~F7)系統および有望系統(十系番号)の茎疫圃場検定を行い、中晩生小豆系統の抵抗性の評価およ

び選抜を行う。

G 畑作物品種開発（根菜類）

(26) 畑作物の地域適応性検定試験（馬鈴しょ、優決基本相当）（平成 19 年～継続）

北農研センターおよび北見農試育成有望系統（北海および北育番号・ホクレン農総研との共同研究育成系統を含む）について、生産力その他諸特性を調査し、上川地域における適応性を検討する。

(27) 優決 馬鈴しょ（馬鈴しょ、優決現地相当）（昭和 42 年～継続）

北農研センターおよび北見農試育成有望系統（北海および北育番号・ホクレン農総研との共同研究育成系統を含む）について、現地試験による上川地域への適応性を検討する。

(28) 馬鈴しょ輸入品種等選定試験 1) 生産力検定試験（馬鈴しょ、優決基本相当）、2) 現地試験（馬鈴しょ、優決現地相当）（令和 3～7 年）

海外導入品種、ホクレン農総研およびカルビーポテト(株)育成有望系統（HPおよびCP番号）について、生産力その他諸特性の調査並びに現地試験による上川地域への適応性を検討する（令和 5 年において、導入品種およびHP番号系統の供試なし）。

(29) てん菜輸入品種検定試験（てん菜、優決現地相当）（令和元～5 年）

北農研、ホクレン、北糖および日甜育成または導入系統（北海、H、HTおよびKWS番号）について、現地試験による上川地域への適応性を検討する（令和 5 年は北海番号の供試系統なし）。

H 畑作農業資材試験

(30) 新資材（畑作関係除草剤および生育調節剤）の実用化（昭和 45 年～継続）

除草剤 2 点（春まき小麦およびそば）について、実用化試験を行う。

2) 生産技術グループ

A 水稻栽培法改善試験

(1) 多様なニーズに対応する米品種改良並びに栽培技術早期確立（第Ⅳ期） 4-1) 「上育 471 号（えみまる）」の湛水直播栽培指針および窒素追肥診断基準の確立（令和元～5 年）

水稻生産者の労働力不足に対応可能な直播栽培をさらに普及させるため、良食味で低温苗立ち性に優

れる直播栽培向け新品種「上育 471 号（えみまる）」の栽培指針を策定する。

(2) 多様なニーズに対応する米品種改良並びに栽培技術早期確立（第Ⅳ期） 4-3) 多収新品種候補の栽培技術の開発（令和元～5 年）

「空育 195 号」の栽培特性を明らかにして現行品種より 20%増収が可能な多収栽培技術を開発する。

B 畑作物栽培法改善試験

(3) 気象変動に対応した高品質で安定生産可能な道産小麦の開発促進（第 3 期） 3)-(1) 春まき小麦における肥料価格変動に応じた適正施肥量の設定と秋まき小麦「北見 95 号」のタンパク安定化技術の開発（令和 4～6 年）

収益性確保の観点から、春まき小麦を対象に肥料価格を考慮した適正施肥量を明らかにする。

(4) 畑作物に対する肥効調節型肥料の施用効果試験（令和 4～6 年）

畑作物に対する、被覆肥料を活用した省力かつ環境負荷軽減のための施肥法の代替技術を開発する。

(5) 肥料価格変動に応じたばれいしょ適正施肥量の設定（令和 5～7 年）

収益性の観点に基づき、ばれいしょのリン酸およびカリを対象にして、肥料価格を考慮した適正施肥量を明らかにする。

C 土壌保全・環境保全・土地改良に関する調査

(6) 環境保全型有機質資源施用基準の設定調査（平成 10 年～継続）

農業の基盤である土壌環境の経年的変化を総合的に把握し、適切な土壌管理のための基礎資料を得る。

(7) 農地土壌炭素貯留等基礎調査事業（農地管理実態調査）（令和 3 年～継続）

農家ほ場を対象として、土壌炭素蓄積量及び有機物施用、作物残渣の鋤込み等による土壌炭素の維持蓄積に寄与すると考えられる農地管理を調査する。

(8) 農地土壌炭素貯留等基礎調査事業（農地管理技術検証） 寒冷・積雪地域等の水田における温室効果ガス削減に資する栽培管理の方法等に関する調査（令和 3～7 年）

水田における栽培管理による温室効果ガスの削減を定量化するため、移植栽培よりも試験事例が少なく、湛水期間が短い直播栽培において中干しおよび

秋耕によるメタン削減量を調査する。

(9) 農業農村整備事業等に係る土壌調査

(昭和40年～継続)

道営土地改良事業計画地区の土壌断面及び物理化学性を調査し、改良対策と工種導入時の留意点を示す。また、整備事業の効果を把握するため、整備による土壌改良効果と作物収量の関連を検討する。

D 病害虫試験

(10) 農作物病害虫生理障害診断試験・緊急対策試験
(令和2～6年)

突発的に発生する病害虫や栄養生理障害による被害を回避するため、それらの診断と対応策を提示する。併せて、道内で新たに発生した病害虫の情報を記録し蓄積する。

(11) 病害虫発生予察調査 (昭和16年～継続)

植物防疫法に基づいて、病害虫の発生予察法の確立を図るとともに、発生予察情報を関係機関に提供して病害虫防除の適正を図る。

(12) 気象・画像データを用いた病害虫防除の効率化
(令和5年)

画像解析によりフェロモントラップの捕獲虫を遠隔から自動計測する技術を開発する。また、気象条件から作物の生育ステージにあわせて薬剤散布時期を判断するツールを開発する。

(13) アスパラガス生産に働き方改革を！改植技術「柵板式高畝栽培」を基盤とした省力安定栽培システムの開発 北海道におけるアスパラガス柵板式高畝栽培システムの適性評価 (令和2～6年)

露地栽培において「柵板式高畝栽培システム」の特性を評価し、本システムの特徴を活用した疫病対策としての有効性を評価する。

(14) きゅうりホモプシス根腐病に対する化学農薬を用いない防除対策の確立 (令和5～8年)

施設栽培きゅうりにおけるホモプシス根腐病に対する道内産転炉スラグおよび土壌還元消毒の効果を確認し、適用条件および施肥対応指針を策定する。

E 畑作物品種開発(豆類)

(15) 道央地域で安定生産できる中晩生小豆品種の開発強化
(令和5～7年)

茎疫病圃場抵抗性DNAマーカーの有効性を検証することで、小豆品種を早期に開発・普及し、道産小豆の安定供給に努める。

(16) 小豆の障害抵抗性に優れる品種開発促進

(令和4～6年)

小豆の有望系統および育成系統のアズキ茎疫病レース3・レース4およびアズキ萎凋病に対する抵抗性を明らかにする。

F 野菜類品種開発

(17) 果実品質に優れ多収な春どりいちご品種の開発 3) 地域適応性検定 (令和3～5年)

「ゆきララ」並の果実品質を有する多収品種を開発する。

G 野菜栽培法改善

(18) 持続可能な施設園芸のための環境制御技術の高度化
(令和4～6年)

圃場内で太陽光発電した電力を用いて、環境制御を効果的かつ安定的に行うシステムを構築する。

(19) 近未来の社会構造の変化を見据えた力強い北海道食産業の構築 新規道産野菜の加工・流通技術の開発 (令和2～6年)

良食味なケール的一种であるボーレコールを冬期無加温ハウスにおいて、長期にわたり安定供給する生産加工流通体系を構築する。さらに、冬期無加温での他の品目(こまつな、ほうれんそう、わさび菜など)への展開も行う。

(20) アダプティブMAPシステムを用いたブロッコリーの高鮮度流通に関する研究 (令和5～7年)

青果物用鮮度保持技術「アダプティブMAPシステム」について、道産ブロッコリーの国内流通における鮮度保持効果、利用条件および導入効果を明らかにする。

H 農業資材試験

(21) 除草剤・生育調節剤の実用化試験

(昭和45年～継続)

アスパラガスに対する除草剤の北海道における実用性を確認する。

(22) 殺菌剤・殺虫剤の実用化試験

(昭和45年～継続)

各種病害虫に対する新規農薬32点の防除効果を検討し、その実用化を図る。

(23) 肥料・土壌改良およびその他資材

(昭和45年～継続)

水稻育苗用培土(2資材)および馬鈴しょ葉面散

布材を検討し、その実用性を確認する。

L 革新的技術導入による地域支援

(24) 道北地域における水稲高密度播種短期育苗技術の導入支援 (令和5~6年)

上川北部、留萌の現地圃場において「えみまる」による高密短技術の評価を行い、そのメリットを示すことで道北地域における高密短技術の導入促進を図る。

3. 地域支援活動

1) 地域農業技術支援会議

地域農業技術支援会議は、地域農業が抱える課題に迅速に対応するため、農試・普及センター・振興局が一体となって協働により課題解決を図る体制として各振興局ごとに設置されたものであり、課題の把握と集約、対応方策の策定、役割分担と合意形成、実証試験等の実施と成果とりまとめ、検証、評価、普及などを行うこととしている。

本年度の活動として、上川支援会議では、事務局会議(5月26日、1月10日)、四者会議(2月26日)、を開催し、必要な調査等を進めた。また、成果を地域に還元する地域関係者会議を開催した(8月9日)。本年度収集した要望課題は1課題(秋まき小麦栽培における防除体系の検討)であった。

留萌支援会議では、事務局会議(6月20日、12月20日)、地域関係者会議(6月27日、2月28日)、プロジェクト課題打ち合わせ(スマート農業、7月19日)、スマート農業勉強会(8月24日 プ

ロジェクト課題)、四者会議(1月31日)を行った。本年度収集した要望課題は10課題(コスト低減対策、畑作物収量向上、WCS適正栽培、冬野菜栽培技術確立、直播もち品種開発、スマート農業の推進、留萌における水田活用、水稲早熟省力多収良食味品種開発、高温耐性米開発、熊害対策)であった。前年度要望に基づくプロジェクト課題として実施したものは1課題(管内一円でのスマート農業の推進)で、関係機関と共に勉強会を行うとともに今後の推進方法について日本農業情報システム協会(JAISA)などとの打ち合わせを行った。

2) 道北地域農業技術センター連絡会議(NATEC)

上川、留萌、宗谷管内における自治体や生産者団体、民間企業が設置した調査研究・研修機関の情報交換の場としてNATECが設置されている。本年度は幹事会(7月14日:和寒町、1月19日:メール)現地検討会(8月22日、旭川市農業センター)、地域情報交換会・総会(3月14日web)等の活動を行った。

3) 上川水稲直播ネットワーク

上川、留萌管内における水稲直播栽培技術の普及啓蒙を図る目的で活動を行った。事務局を上川農試が担い、事務局会議(5月18日、10月4日共にメール開催)、理事会(6月19日、11月2日)、夏期情報交換会(7月18日)、冬期情報交換会・総会(12月19日)を開催した。

IV 試験研究の成果と普及

1. 技術普及に移された成果

1) 普及奨励事項

なし

2) 普及推進事項

なし

3) 指導参考事項

(1) 水稲「えみまる」の湛水直播栽培における窒素施肥技術（上川農試生産技術 G、中央農試水田農業 G）

「えみまる」の湛水直播栽培における窒素施肥標準量と追肥・倒伏軽減剤の要否判定基準を明らかにした。

(2) 水稲「そらきらり（空育 195 号）」の栽培管理指標（中央農試水田農業 G、上川農試生産技術 G）

「そらきらり」の高い乾物生産能力を示し、基準収量対比で 120% を基本とする窒素施肥量は施肥標準量とすることや収穫適期の出穂期後日平均気温積算値を明らかにした。

(3) 水稲育苗用培土「HB-2301」の成苗および中苗に対する育苗適応性（上川農試生産技術 G、中央農試水田農業 G）

水稲育苗用培土「HB-2301」は、成苗および中苗に対して対照培土と同等の育苗適応性を有することを明らかにした。

(4) 水稲育苗用培土「パールマット V」の成苗に対する育苗適応性（上川農試生産技術 G、中央農試水田農業 G）

水稲育苗用培土「パールマット V」は、成苗に対して対照培土と同等の育苗適応性を有することを明らかにした。

4) 研究参考事項および行政参考事項

なし

2. 論文ならびに資料

1) 研究論文、試験成績

著者名	論文名	学会誌名	号数	頁	発行年
Daisuke Sasaki	First report of an adventive aphid, <i>Thelexes suberi</i> (Hemiptera, Aphididae, Thelexinae) in Japan	Japanese Journal of Entomology (New Series)	26(2)	66-75	2023
Daisuke Sasaki	First formal report of an adventive species <i>Illinoia</i> (<i>Masonaphis</i>) <i>lambersi</i> (Hemiptera, Aphididae) from Japan	Proceedings of the Entomological Society of Washington	125	165-178	2023
岡元英樹、古山真一、地子立	無加温栽培した冬どりボーレコールの生育と養分吸収特性	北海道立総合研究機構農業試験場集報	108	9月18日	2024
中村隆一、藤井はるか、竹内晴信	北海道耕地土壌の2016～2019年における炭素貯留量	北海道立総合研究機構農業試験場集報	108	29-35	2024

2) 口頭・ポスター発表

発表者名(所属)	発表名	発表場所	要旨巻号頁	開催地	開催期間
西宮耕栄、本間千晶、中村隆一	木質ペレット由来ガス化発電副産物の土壌改良効果-チャーの優位性の検証-	日本炭化学会	日本木材学会北海道支部講演集, 55, 24-26, 2023	東京都	9/7-8
野田智昭	冬季無加温ハウスでの野菜栽培と収益性～ゆきあまケールを作ってみませんか～	冬期無加温ハウス野菜生産セミナー	-	和寒町	9/12
古山真一	パイプハウスの統合環境制御でトマトをたぐさんとろう!	ホクレン令和5年度担い手向けWeb研修会(トマト・ミニトマト)	-	WEB	11/8

(つづき)

発表者名(所属)	発表名	発表場所	要旨巻号頁	開催地	開催期間
佐藤圭、栢森美如、堀川謙太郎、長濱恵、長澤秀高、堀内優貴、相馬ちひろ、鈴木孝子	「きたひまり」由来アズキ茎疫病抵抗性遺伝子の座乗領域	日本育種学会・日本作物学会北海道談話会	日本育種学会・日本作物学会北海道談話会会報, 64, 6-7, 2023	web	12/2
堀川謙太郎、阿出川さとみ、相馬ちひろ、鈴木孝子	北海道の秋まき小麦におけるコムギ萎縮病ウイルス (SBWMV) の感染に関する基礎調査	日本育種学会・日本作物学会北海道談話会	日本育種学会・日本作物学会北海道談話会会報, 64, 62-63, 2023	web	12/2
粕谷雅志、森田耕一、木下雅文、尾崎洋人	北海道のもち米における胴割粒発生品の品種間差について	日本育種学会・日本作物学会北海道談話会	日本育種学会・日本作物学会北海道談話会会報, 64, 66-67, 2023	web	12/2
古山真一、飯泉元気、高濱雅幹、堀武司	オフグリッド型環境制御システム開発に向けたアクチュエータの選定とその運用	北海道園芸研究談話会2023年度研究発表会	北海道園芸研究談話会会報, 57, 30-31, 2023	札幌市	12/4
岡元英樹、高濱雅幹、地子立、古山真一	野菜の無加温周年栽培体系における通年不耕起定植の可能性	北海道園芸研究談話会2023年度研究発表会	北海道園芸研究談話会会報, 57, 24-25, 2023	札幌市	12/4
中村隆一	硫酸アルミニウム液滴下による土壌懸濁液中硝酸態窒素濃度測定簡易化	日本土壌肥料学会2023年度秋季大会	日本土壌肥料学会講演要旨集, 第70集, p235, 2023	札幌市	12/8
野田智昭	北海道における冬季無加温栽培の開発	ウクライナ園芸農業オンラインセミナー	—	WEB	12/13
下間悠士、松原慧、古川勝弘、丸山麻理弥、佐々木太陽	物体検出AIと自動撮影カメラを組み合わせたコナガフェロモントラップの遠隔計数技術	第77回北日本病害虫研究発表会	北日本病害虫研究会会報, 75, 印刷中, 2024	仙台市	2/21-22
古山真一	北海道におけるパイプハウス環境制御「機器の導入とトマトでの効果」	北海道施設園芸高度化フォーラム	—	札幌市	2/27-28
木下雅文、道満剛平、堀川謙太郎、山下陽子、阿出川さとみ、相馬ちひろ	北海道における密粒直立穂多収遺伝子DEP1を導入した水稻育成系統の特性	日本育種学会第145回講演会	—	東京都	3/16-17
堀川謙太郎、栢森美如、白澤健太、山口直矢、相馬ちひろ、佐藤圭、長濱恵、小倉玲奈、藤根統、東岱孝司、村田暢明、長澤秀高、堀内優貴	育種事業データを活用したアズキ茎疫病抵抗性に関するゲノムワイドアソシエーション解析	日本育種学会第145回講演会	—	東京都	3/16-17
阿出川さとみ、堀川謙太郎、田中義則、鈴木孝子	道総研の育種事業を支援する系譜追跡 Web-DB システム Pedigree Tracer (PEDIT) の開発	日本育種学会第145回講演会	—	東京都	3/16-17
大西志全、堀川謙太郎、森田耕一、相馬ちひろ、佐藤優美、其田達也	既知コムギ赤かび病抵抗性 QTL の新規アレルはコムギ赤かび病抵抗性母本「北系 1932」および「北系 1976」の育成において重要な役割を果たした	日本育種学会第145回講演会	—	東京都	3/16-17
林和希、齊藤涼介、其田達也、島田翔太、大西一光、堀川謙太郎、佐藤圭、大西志全	北海道コムギ育種における半矮性遺伝子 Rht8 の有用性の検証	日本育種学会第145回講演会	—	東京都	3/16-17
野田智昭	北海道産サツマイモの貯蔵・加工特性と栽培技術の改善	ホクレン担い手向けWEB研修 (さつまいも)	—	WEB	3/19
古山真一、堀川謙太郎、高濱雅幹	北海道の冬期無加温栽培における画像解析を活用したリーフレタスの収穫適期の推定	園芸学会令和6年度春季大会	園芸学研究, 32(別1), p335, 2024	神奈川県	3/23-24

3) 専門雑誌、著書・資料

著者名(所属)	タイトル/書籍名	雑誌名/発行者	号数・ISBN	頁	発行年
齋藤優介	赤いんげんまめ「きたロッソ」の窒素追肥技術と最適な収穫時期	農家の友	888	69-71	2023
野田智昭	道産サツマイモの栽培技術と加工適性	農家の友	889	43-45	2023
野田智昭	さつまいもの栽培技術改善と貯蔵・加工特性	ニューカントリー	831	18-21	2023
古山真一	技術特集 環境制御に挑戦する！製作方法を6工程に要約して紹介	ニューカントリー	832	14-17	2023
古山真一	技術特集 環境制御に挑戦する！普及が進む伊達市の事例	ニューカントリー	832	17-19	2023
齋藤優介	「まめまめしく 豆栽培」-「きたロッソ」の窒素追肥技術と加工適性を考慮した収穫時期の設定	ニューカントリー	834	21-23	2023

(つづき)

著者名(所属)	タイトル/書籍名	雑誌名/発行者	号数・ISBN	頁	発行年
佐々木大介	スマートフォンに装着した精子観察キットによる植物病原糸状菌の胞子観察法	植物防疫	77(7)	26-30	2023
野田智昭	道産さつまいもの加工時の特徴・貯蔵法・栽培技術の改善	農業新技術	2023年号	27-28	2023
古山真一	施設園芸における環境モニタリングとデータを活用した環境制御	農家の友	894	72-74	2024
齋藤優介	赤いんげんまめ「きたロツン」を増収させる栽培技術と最適な収穫時期について	豆類時報	895	30-37	2024
野田智昭	北海道産さつまいもの貯蔵、加工特性と栽培技術	アグリポート	46	21-22	2024
唐 星児	タマネギ移植栽培における肥効調節型肥料を用いた施肥技術	農耕と園芸	2024年春号	20-23	2024

4) 新聞等記事

著者名(所属)	タイトル	新聞等名	発行日
齋藤優介	収量と品質を高める 赤いんげんまめ「きたロツン」の栽培方法	農業共済新聞	7/19
野田智昭	道産サツマイモ貯蔵と栽培法、加工特性	農業共済新聞	9/6
粕谷雅志	北海道における水稻品種開発の経緯と方向性	農村と都市をむすぶ	10/1

5) 印刷刊行物

名称	発行日	頁数	配布先
令和4年度(2022)上川農業試験場年報	10/2	31	簡易製本で場内配布、およびホームページにて公開

3. 研修生の受入

1) 普及指導員研修

名称	開催日	開催地	参加者数	対象者	対応者
令和5年度新技術伝達研修(上川)	2/8	WEB	—	上川農業改良普及センター職員	生産技術G
令和5年度新技術伝達研修(留萌)	2/9	WEB	—	留萌農業改良普及センター職員	生産技術G
留萌農業改良普及センター若手職員との意見交換会	8/23	上川農試	4	留萌農業改良普及センター職員	各G

2) 学校教育研修・職場体験学習

名称	開催日	開催地	参加者数	対象者	対応者
旭川農業高校インターンシップ	6/14-16	上川農試	1	2年生生徒	研究部長、各G
拓殖大学北海道短期大学学生研修	6/14	上川農試	58	教員、学生	研究部長、各G
旭川市立江丹別小学校総合学習	6/23	上川農試	2	教諭、5年生児童	研究部長
旭川工業高等専門学校視察研修	8/17	上川農試	2	保護者、学生	尾崎研究主幹
比布中央学校農業インタビュー	8/22	上川農試	10	比布中央学校7学年(中1)	研究部長
比布中央学校職場体験学習	9/21	上川農試	2	比布中央学校8学年(中2)	研究部長、各G
帯広農業高校第1学年農業科科学科農事見学研修	11/2	上川農試	42	教員、生徒	各G
岩見沢・旭川・帯広農高への環境制御に関する技術研修	3/8	上川農試	17	教員、生徒	生産技術G

3) JICA 研修等

名称	開催日	開催地	参加者数	対象者	対応者
「天水稲栽培・種子生産及び品種選定技術」コースに係る研修	9/5	上川農試	11	アンゴラ、ガーナ、リベリア、ナイジェリア等アフリカ10カ国	尾崎研究主幹
JICA ウクライナ農業セクター基礎調査事業に係る第3回農業セミナー	12/13	web	66	ウクライナ	野田研究主査

4) その他

名称	開催日	開催地	参加者数	対象者	概要
上川管内農業改良普及センター所長・支所長会議視察研修	6/23	上川農試	25	普及センター所長、支所長、上川技術普及室、上川総合振興局	場概要説明、圃場視察

4. 技術相談及び技術指導

1) 技術相談

内容	相手方	月日	回答方法
環境制御の設定について	民間会社・機関	4/4	電話
環境制御の設定について	民間会社・機関	4/5	電話
環境制御の設定について	民間会社・機関	4/12	電話
環境制御の設定について	民間会社・機関	4/12	メール
環境制御の設定について	民間会社・機関	4/12	メール
環境制御の設定について	民間会社・機関	4/15	電話
無加温ハウスの施工方法などについて	生産者・生産法人	4/15	電話
MA包装フィルムの購入先について	民間会社・機関	4/15	メール
MA包装フィルム使用時の積算温度について	民間会社・機関	4/19	メール
コマツナ本葉に発生する障害について	民間会社・機関	5/6	電話
水田からのメタンガスの採取方法について	行政・地域指導機関	5/10	対面
北海道の主要な米品種について	報道機関	5/26	メール
でん粉価と萌芽性の関係について	農改普及センター	5/27	メール
水田のリン酸、カリ施肥量について	民間会社・機関	6/1	メール
PSP水耕パネルについて	民間会社・機関	6/1	メール
サツマイモの育苗について	民間会社・機関	6/9	電話
野菜加工残渣堆肥化について	民間会社・機関	6/9	電話
サツマイモの調査方法について	民間会社・機関	6/15	メール
土壌診断に基づく施肥設計について	生産者・生産法人	6/16	電話
放射線育種米について	行政・地域指導機関	6/22	メール
シャドークイーンの色素について	農改普及センター	6/22	メール
さつまいもの収穫時期について	生産者・生産法人	6/24	メール
ポーレコールの作付状況について	生産者団体	8/2	メール
サツマイモの畝幅などについて	民間会社・機関	8/4	メール
北海道でのサツマイモ栽培について	民間会社・機関	8/5	対面
北海道でのサツマイモ栽培について	報道機関	8/9	電話
北海道のサツマイモ栽培の歴史	報道機関	8/16	メール
北海道のサツマイモの今後について	大学・公的研究機関	9/1	メール
馬鈴しょの夏疫病について	行政・地域指導機関	9/5	メール
大豆の遊離糖含量の測定方法	大学・公的研究機関	9/26	電話、メール
下水汚泥の農業利用拡大に向けた対応打診	行政・地域指導機関	10/4	メール
北海道のサツマイモ生産について	報道機関	10/13	メール
サツマイモの流通条件について	民間会社・機関	10/13	メール
施肥ガイド園芸苗床床土基準について	生産者団体	10/21	メール
高温耐性米育種について	報道機関	10/24	対面
除草剤フルミオWDGについて	不明	11/1	メール
水稻あやひめ種子の入手法について	民間会社・機関	11/4	メール
蘗水分について	生産者・生産法人	11/7	メール
サツマイモの施肥について	民間会社・機関	11/24	電話
アスパラガス ジュウシホシクビナガハムシと雑草対策	一般市民	11/24	メール
水稻	農改普及センター	11/24	メール
しゃくやく	行政・地域指導機関	11/28	メール
そばのタデノクチプトサルゾウムシ	行政・地域指導機関	11/30	ビデオ通話
アスパラガス茎枯病	農改普及センター	12/8	メール
かぼちゃ根のコルク化	農改普及センター	12/8	メール
ダイコン黒芯症状	農改普及センター	12/19	メール
水稻玄米の胚部分の着色	農改普及センター	1/13	持ち込み

(つづき)

内容	相手方	月日	回答方法
小麦ふ枯病の防除時期/品種間差	民間会社・機関	1/25	メール
スターチス灰色かび病の防除	生産者団体	1/30	メール
かぼちやのつる枯病と疫病対策	農改普及センター	2/6	電話
かぶ(白菜、水菜) 葉に斑点	農改普及センター	2/9	メール
かぼちやハリガネムシによる果実の被害?	農改普及センター	2/14	メール
水稲紋枯病の薬剤防除方法	農改普及センター	2/15	対面
トマトかいよう病の防除対策	民間会社・機関	2/15	対面
大豆紫斑病かどうか	農改普及センター	2/16	対面
環境制御施設の建設について	生産者・生産法人	2/22	メール

2) 技術指導

内容	依頼者	月日	合同対応機関
環境制御導入に係る技術指導	行政・地域指導機関	4/17	上川農業改良普及センター
さつまいも苗の増殖実証について	行政・地域指導機関	4/20	上川総合振興局、上川農業改良普及センター
環境制御の設定に係る技術指導	農改普及センター	4/26	
冬のいちご栽培に係る技術指導	生産者団体	5/1	上川農業改良普及センター
環境制御導入に係る技術指導	行政・地域指導機関	5/9	上川農業改良普及センター
超低コスト環境制御導入に係る技術指導	農改普及センター	5/10	
環境制御の設定に係る技術指導	農改普及センター	5/23	
培土開発における生理障害対策について	民間会社・機関	6/1	
冬野菜の防除および環境制御に係る技術指導	行政・地域指導機関	6/2	宗谷農業改良普及センター
環境制御の設定に係る技術指導	行政・地域指導機関	6/5	上川農業改良普及センター
ぶどう栽培指導	生産者・生産法人	6/8	上川普及セ本所
さつまいも苗の増殖実証について	行政・地域指導機関	6/8	上川総合振興局、上川農業改良普及センター
シャインマスカット栽培指導	行政・地域指導機関	6/15	上川普及セ本所
環境制御の設定に係る技術指導	農改普及センター	7/6	
シャインマスカット栽培指導	行政・地域指導機関	7/7	上川普及セ本所
シャインマスカット栽培指導	生産者・生産法人	7/10	上川普及セ本所
環境制御の設定に係る技術指導	農改普及センター	7/12	
そば害虫について	行政・地域指導機関	7/20	上川農業改良普及センター士別支所、上川農試技術普及
さつまいも苗の増殖実証について	行政・地域指導機関	8/2	上川総合振興局、上川農業改良普及センター
環境制御の設定に係る技術指導	行政・地域指導機関	8/28	上川農業改良普及センター
醸造用ぶどう栽培指導	民間会社・機関	9/5	
環境制御の設定に係る技術指導	行政・地域指導機関	9/25	上川農業改良普及センター
シャインマスカット栽培指導	行政・地域指導機関	10/6	
冬野菜・環境制御導入に係る技術指導	生産者・生産法人	10/9	
環境制御の設定に係る技術指導	農改普及センター	10/13	
冬野菜の防除および環境制御に係る技術指導	行政・地域指導機関	10/16	宗谷農業改良普及センター、上川農試
環境制御導入に係る技術指導	農改普及センター	10/18	
冬のいちご栽培に係る技術指導	生産者団体	10/24	上川農業改良普及センター
環境制御の設定に係る技術指導	農改普及センター	10/26	
オフグリッド環境制御に関する技術研修	行政・地域指導機関	11/6	石狩農業改良普及センター

(つづき)

内容	依頼者	月日	合同対応機関
省エネおよび環境制御導入に係る技術指導	生産者・生産法人	11/30	
環境制御の設定に係る技術指導	農改普及センター	12/13	
なす養液栽培に係る技術指導	生産者・生産法人	12/14	
環境制御導入に係る技術指導	行政・地域指導機関	1/23	
環境制御の設定に係る技術指導	農改普及センター	2/20	
環境制御の設定に係る技術指導	農改普及センター	2/22	
パイプハウスの環境データのまとめ方に関する技術指導	農改普及センター	2/29	
北海道における環境制御導入に係る考え方や機器接続に係る技術指導	学校・学生・生徒	3/8	
環境制御導入後の環境データ活用に係る技術指導	行政・地域指導機関	3/11	
環境制御導入に係る技術指導	生産者・生産法人	3/13	上川農業改良普及センター本所
冬野菜の防除および環境制御に係る技術指導	行政・地域指導機関	3/27	宗谷農業改良普及センター
(以下持ち込み診断)			
秋まき小麦に生育不良、茎葉の黄化がみられる。	農改普及センター	4/12	
ホップの葉が枯れてきている。	農改普及センター	4/20	
ばれいしょ表面に、黒い斑点が付着。	農改普及センター	4/25	
秋まき小麦に生育不良、茎葉の黄化がみられる。	農改普及センター	4/26	
秋まき小麦に生育不良、茎葉の黄化がみられる。	農改普及センター	4/26	
秋まき小麦に生育不良、茎葉の萎縮・黄化がみられる。	農改普及センター	5/15	
秋まき小麦に枯葉、萎縮、変色(かすり、赤身かかる)がみられる。	農改普及センター	5/26	
秋まき小麦に枯葉、萎縮、変色(かすり、赤身かかる)がみられる。	農改普及センター	5/26	
秋まき小麦に枯葉、萎縮、変色(かすり、赤身かかる)がみられる。	農改普及センター	5/26	
ミニトマト中位葉の葉脈間・葉柄が褐変している。下葉にはアザミウマ類が多発。	農改普及センター	6/20	
水稲移植後2週間後に白化症状が見られ、4週間後には枯死。	農改普及センター	6/20	
メロン葉柄の付け根が白化。発生部位は、子づる10節目位から上位に目立つ。	農改普及センター	6/21	
ピーマン生長点付近に黄化症状がみられ、果実にいぼ状突起がみられる。	農改普及センター	6/22	
水稲地際から上部数cm以内より大きく湾曲した茎葉が見られる。	農改普及センター	6/22	
きゅうり葉の縁が黄化、白い斑点、ハローがみられる。株の下位葉(1~6節目)に発生。	農改普及センター	6/23	
すいか着果始め頃から日中に萎れ症状がみられる。	農改普及センター	7/5	
イネの葉先枯れ症状(2cm程度)が見られる。	農改普及センター	7/7	
メロン葉の色抜けがあり、モザイク病を疑っている。	農改普及センター	7/18	花・野菜技術センター
水稲葉先枯れ、葉の変色、穂の出すくみがみられる。	農改普及センター	7/20	
トルコギキョウ下葉の先から枯れ上がっている。茎も地際から白く枯れている。	農改普及センター	7/24	
トルコギキョウ株元から茎が枯れ上がっている。スポット的に数カ所発生。	農改普及センター	7/24	
さやいんげんのさやに虫に刺されたような跡が付き、規格外となっている。	農改普及センター	7/25	
ばれいしょ葉に黒い斑点がみられる。	農改普及センター	7/28	
トマトしおれ症状がハウス6棟中4棟でみられる。	生産者・生産法人	8/15	
水稲でアワヨトウと思われる幼虫を確認。	農改普及センター	8/16	

(つづき)

内容	依頼者	月日	合同対応機関
かぼちゃ出荷後、腐敗が発生。	生産者団体	8/21	
すいか出荷後、果実が腐敗。	農改普及センター	8/24	
シャクヤク葉に斑点が見られ、葉裏にはオレンジ色の斑点がみられる。	行政・地域指導機関	8/25	
ミニトマト下葉からしおれ症状がみられる。	農改普及センター	9/5	
ミニトマト下葉からしおれ症状がみられる。	農改普及センター	9/5	
たまねぎ出荷後、腐敗。外葉部分の痛みが多い。	農改普及センター	9/5	
かぼちゃ果実日大期以降しおれがみられ、根部は褐変腐敗。	農改普及センター	9/15	
ヘイオーツが広範囲に枯れ、倒伏している。	農改普及センター	9/27	
ダイコン中心部に黒芯症状が発生。	農改普及センター	10/2	
しゅんぎく下葉に褐変症状がみられる。	農改普及センター	10/4	
大豆収穫、調整後の子実に、黒～黒褐色の斑紋が発生している。	農改普及センター	10/20	
食用ゆり出荷後、市場着荷後に箱内で鱗片の褐変症状が見られた。	農改普及センター	10/30	
こまつな株元(特に最外葉の株元)に腐敗症状が散見される。	農改普及センター	10/31	
赤えん豆製品の袋の中に白い粉が入っていた。白い粉の正体を知りたい。	農改普及センター	1/16	

5. 講師等の派遣

講演会等の名称	依頼元	月日	担当者
下水汚泥由来肥料の特徴	GKP BISTRO下水道チーム	8/2	中村隆一
北海道における水稻品種改良の現状と課題	北海道土地改良事業団体連合会	10/5	尾崎洋人
担い手向けWeb研修会（トマト）	ホクレン農業協同組合連合会	11/18	古山真一
旭川工業高等専門学校運営懇話会	旭川工業高等専門学校	12/6	吉村康弘
上川農業試験場の歩みとこれからの農業	旭川ロータリークラブ	12/15	吉村康弘
担い手向けWeb研修会（豆類）	ホクレン農業協同組合連合会	1/19	齋藤優介
豆類の新品種	公益財団法人日本豆類協会	2/16	藤田涼平
豆類において注意を要する病害虫	公益財団法人日本豆類協会	2/16	古川勝弘
良質小麦安定生産技術講習会	一般社団法人北海道農産協会	2/22	唐星児
北海道施設園芸高度化セミナー	北海道養液栽培研究会	2/27	古山真一
良質米安定確収技術講習会	一般社団法人北海道農産協会	2/29	齋藤優介
令和5年度地域農業づくり懇談会	北海道上川総合振興局	3/18	谷藤健

6. 関連委員会・学会研究会役員

名称	機関名	担当者
北海道農産協会技術専門部会委員	(一社)北海道農産協会	堀川 謙太郎
令和5年度北海道米品質向上対策委員会委員	(一社)北海道農産協会	尾崎 洋人
損害評価会委員	北海道農業共済組合連合会	尾崎 洋人
ゆめぴりかコンテスト審査員	北海道米の新たなブランド形成協議会・北海道米販売拡大委員会	尾崎 洋人
旭川工業高等専門学校運営懇話会委員	旭川工業高等専門学校	吉村 康弘
殺菌剤耐性菌研究会 幹事	日本植物病理学会	栢森 美如
植物病害診断研究会 幹事	日本植物病理学会	栢森 美如
技術士対応委員会 委員	日本植物病理学会	栢森 美如
日本土壌肥料学会代議員	日本土壌肥料学会	後藤 英次
日本生物環境工学会評議員	日本生物環境工学会	古山真一

V 広報・場運営・その他

1. 広報

1) 一般参観来場者

新型コロナウイルス感染症の規制が緩和されたことから本年度より受け入れを再開した(特定の目的を持った視察研修については個別詮議によりこれまでも受け入れを行っていた)。

今年度の一般参観来場者数：175名

2) 公開デー

新型コロナウイルス感染症の規制緩和にともない、4年ぶりに開催した。

開催日：令和5年8月8日(火) 10:00～14:00

来場者：311名

3) 新技術発表会「道北農業新技術2024」

新型コロナウイルス感染症の規制緩和にともない、4年ぶりに対面形式で開催した。

開催日：令和6年3月1日(金) 13:00～15:30

場所：北海道上川総合振興局 講堂

内容：表11を参照

参加者：上川農試除き 101名

表11 「道北農業新技術2024」の開催内容

講演タイトル	講演者
(1) 新品種・新技術トピックス	
生育をよく見て追肥！水稲「えみまる」湛水直播栽培の施肥管理	中村隆一
多収米「そらきらり」の作り方	齋藤優介
欧州ワイン用ぶどう品種を北海道で育てる	内田哲嗣
めざせ！そばの生産力向上～自らできる畑の土層改良～	須田達也 ¹⁾
効果的な秋まき小麦の赤さび病防除	新村昭憲 ¹⁾
令和6年に特に注意を要する病害虫	長濱恵
(2) ポスターセッション(令和5年度に普及に移される新しい技術のうち、上記含めの10課題)	
(3) 普及活動事例の紹介	
水稲高密度播種短期育苗にかかる育苗方法の検討	辻敏昭 ²⁾
(5) 技術普及実証試験成果の紹介	田縁勝洋 ³⁾
大きないちご「ゆきララ」の上手な作り方	
(6) 地域農業技術支援会議の紹介	田島健一 ⁴⁾
(7) 全体質疑	

¹⁾ 中央農試、²⁾ 上川農業改良普及センター、³⁾ 花・野菜技術センター、⁴⁾ 上川総合振興局

4) マスコミ等への対応

取材日	取材者	掲載・放送	内容	対応者
9/7	NHK旭川放送局	NHK道内ニュース9/7	8月猛暑による上川地域農作物への影響について	谷藤健
10/25	HBCラジオ	HBCラジオ「朝刊さくらい」10/26	北海道のサツマイモ栽培について	野田智昭
11/14	北海道新聞	北海道新聞11/16	北海道のサツマイモ栽培について	野田智昭
12/8	北海道新聞	北海道新聞12/30(デジタル12/29)	北海道水稲における高温耐性品種育成の現状と今後の取り組みについて	尾崎洋人
12/20	北海道新聞	北海道新聞1/14(デジタル1/13)	北海道もち米について	尾崎洋人
3/5	NHK旭川放送局	NHK道内ニュース3/5	冬期の温室における水稲の収穫(刈取り作業)について	森田耕一

5) イベント等への出展

名称	出展日	イベント名称	内容	開催地
令和5年度は該当なし				

2. 場運営

1) 場内委員会

(1) 構成

委員会名	委員長	副委員長	委員 (f: 技術普及室職員、k: 組合推薦者)						
公開デー実行委員会	谷藤 健	内田哲嗣	伊東良浩	藤田涼平	佐々木瞭太	唐 星児	栢森美如	竹永遵一 ^f	
新技術発表会実行委員会	谷藤 健	内田哲嗣	森 光治	尾崎洋人	後藤英次	山岸修一 ^f	—	—	—
業務委員会	尾崎洋人	—	中川 諭	粕谷雅志	堀川謙太郎	齋藤優介	佐々木大介	兼山幸記	
図書・情報システム委員会	谷藤 健	堀川謙太郎	伊東良浩	森田耕一	栢森美如	—	—	—	—
作況・気象委員会	藤田涼平	—	粕谷雅志	堀川謙太郎	—	—	—	—	—
公宅委員会	森 光治	—	伊東良浩	山岸修一 ^f	樫村 優	佐々木大介	—	—	—
安全衛生委員会	吉村康弘	—	谷藤 健	森 光治	尾崎洋人 ^A	後藤英次 ^E	藤田涼平 ^k	古山真一 ^k	佐々木大介 ^k
			樫村 優 ^k	伊東良浩	本田愛花	A: 安全管理者 E: 衛生管理者			
入札参加指名選考委員会	吉村康弘	森 光治	谷藤 健	尾崎洋人	後藤英次	—	—	—	—
土壌病害対策委員会	谷藤 健	尾崎洋人	兼山幸記	木下雅文	唐 星児	長濱 恵	藤田涼平	内田哲嗣	
各種活動の分担 (* 遺伝資源連絡委員)	NATEC対応	谷藤 健	内田哲嗣	有機農業ネットワーク対応			長濱 恵	唐 星児	
	遺伝資源担当者	尾崎洋人*	藤田涼平	水稻直播ネットワーク対応			谷藤 健	内田哲嗣	
	北農会協力委員	谷藤 健		上川地域道総研連絡会議対応			内田哲嗣		

(2) 活 動

業務委員会では、圃場管理業務、環境整備業務等を効率的かつ円滑に遂行するため、毎週木曜日に業務委員会を開催した。

図書・情報システム委員会では、ホームページの管理更新を行い、定期作況報告等を随時更新した。10月以降は道総研 IT 資産監視システム (SARMS) 運用に向けた作業を行った。

安全衛生委員会を毎月開催し、安全衛生対策に関する意見交換、職場巡回点検、注意喚起などを実施した。

2) 諸会議

(1) 運営会議

場の管理運営に係る事項の協議を行う場として運営会議を開催した。開催日は4月19日、6月21日、8月23日、10月18日、12月21日、2月21日の6回であった。

(2) 北海道農業試験会議に係る場内検討会

研究課題検討会議、秋まき小麦設計会議、成績会議及び設計会議に提出する試験研究課題について、それぞれ6月28日、8月24日、12月5日、2月7～8日に場内検討会を行った。

(3) 現地委託試験検討会議

農業改良普及センターへの委託試験（主に新品種選定に係る業務）検討会議を開催した。成績検討会議は11月29日（畑作・野菜）および11月30日（水稻）に、そして設計検討会議は3月26日に開催した。成績検討は対面とwebを併用したハイブリッド形式、設計検討はwebのみでの開催とした。

3) 職員の研修

(1) 道総研職員研修

研修者名	研修名	研修期間	日数	場所
佐々木 瞭太、 竹内 悠真	新規採用職員研修A	R5/4/10～12	3	札幌市
佐々木 瞭太、 竹内 悠真	新規採用職員研修B	R5/6/30、 7/21、10/30、 12/1	4	web
佐々木 瞭太	新規採用職員研修C	R5/7/31～8/4	5	江別市
竹内 悠真	新規採用職員研修C	R5/9/11～15	5	余市町、恵庭市
佐々木 瞭太、 竹内 悠真	農業研究本部新規採用研究職員研修	R5/11/30	1	札幌市
谷藤 健	新任研究部長級研修	R5/4/25～26	2	web
有村 優季	会計研修	R5/9/19～20	2	web
吉村 康弘、 谷藤 健	シニア層研修	R5/11/14	1	web
吉村康弘、堀川 謙太郎、佐々木 瞭太、竹内悠真	道総研研究不正防止計画に基づく研究倫理研修	R5/5/24～6/6	-	eラーニング で実施
吉村康弘、有村 優季、堀川謙太 郎、佐々木瞭 太、竹内悠真、 ほか非常勤職員4 名	道総研研究不正防止計画に基づくコンプライアンス研修	R5/5/17～6/9 7/24～7/25	-	自習
非常勤職員14名	道総研研究不正防止計画に基づくコンプライアンス研修	R5. 6. 6	1	講堂

(2) 技術研修

研修者名	研修名	研修期間	日数	場所
吉村康弘	職場巡視・点検セミナー	5月22日	1	札幌市
唐星児	乾燥設備作業主任者技能講習	6月26日-27日	2	旭川市
谷藤健	安全管理者選任時研修	10月5日-6日	2	札幌市
佐々木大介 齋藤優介	化学物質管理者研修	10月26日	1	旭川市
堀川謙太郎 竹内悠真 佐々木瞭太	冬道運転講習	1月29日	1	旭川市

(3) 職場研修

研修等名	内容	講師	実施日	受講者数
交通安全情報の周知	北海道警察からの情報を全職員にメールで周知	総務課	随時	29
非常勤職員雇入時研修	事務手続き、行動とモラル（セクハラ等を中心）、安全な農作業、土壌病害虫汚染防	総務課、研究部長、水稻畑作G（管理）	4月11日、 5月11日	27
場内参観リハーサル	各グループの研究課題内容と圃場試験配置について	各研究G担当者	6月7日	32
e-ラーニング研修	コンプライアンス、ヘルスケア、コミュニケーション	(株)ビズアップ総研	6月9～ 2月29日	29
消防訓練	通報訓練、消火訓練、防火シャッターと防火扉の閉鎖訓練	大雪消防組合比布消防署	10月27日	44
交通安全研修	冬道の安全運転講習	桑園自動車学校	11月20日	29
情報セキュリティ・個人情報研修	情報セキュリティ及び個人情報保護に関する研修	法人本部	2月27～ 3月19日	29

(4) 学会発表等リハーサル

研究職員の学会発表やプレゼンを実施するのに先立ち、場内において事前の発表リハーサルを随時行った。

4) 表彰および学位授与

授賞日	件名	受賞者	業績
9/19	道総研職員表彰（永年勤続）	谷藤 健	30年勤続
11/28	北海道新聞文化賞	道総研農業研究本部 （中央・道南・上川農業試験場）	道産米の食味向上や米農家の所得向上に貢献
1/18	道総研職員表彰（農研本部長表彰）	古山 真一	道総研主催のリクルート・人材育成活動
2/16	令和5年度北海道職員表彰	有村 優季	若手局内横断プロジェクトチームによる動画を活用した情報発信の強化に向けた取組

3. 自己点検への対応

リストNo.	項目	報告件数等	備考
0	各機関へ直接寄せられたニーズ把握件数	0	
1	研究成果発表会・企業向けセミナーの開催件数	1	
2	研究会等の開催件数	0	
3	展示会等への出展件数	0	
4	研究報告書の発行件数	1	
5	技術資料の発行件数	1	
6	その他紙媒体発行件数	0	
7	普及組織との連絡会議等開催件数	10	
8	企業等へ訪問し広報活動した件数	0	
9	行政や企業等で活用された成果の数（農研本部で計数）	—	
11	設備使用の件数	0	
12	研究成果発表会・企業向けセミナーによる公表件数	12	
13	研究会における公表件数	3	
14	学会誌等の掲載件数	19	
15	研究報告書での発表件数	1	
16	学会やシンポジウム等での発表件数	18	
17	電子媒体による公表件数	2	
18	プレスリリース、定例報道懇談会の件数	2	
19	学会役員・委員件数	5	
20	技術相談の件数	56	
21	技術指導の件数	81	
22	講師等派遣の件数	12	
23	技術審査の件数	0	
26	研修会・講習会の開催状況（件数）	4	
26	研修会・講習会の開催状況（人数）	192	
27	研修者の受入状況（件数）	16	
27	研修者の受入状況（人数）	207	
28	連携協定先との事業の実施件数	0	
29	道関係部との連絡会議等の開催件数	13	
30	市町村との意見交換等の開催件数	2	
31	関係団体との意見交換等の開催件数	3	
32	道民意見把握調査の回答数	210	
33	出前授業の実施件数	1	
35	国内研修Ⅱ（外部講師招聘・受け入れ）	0	
36	専門研修Ⅰの派遣件数	0	
37	専門研修Ⅱの派遣件数	4	
38	道民向けイベントの開催件数	1	
38	道民向けイベントの延べ来場者数	321	
39	国際協力事業等への協力件数	2	
40	災害等に関係した技術指導件数	0	
41	災害等に関係した委員派遣件数	0	
42	ホームページ発信・更新件数	9	
43	メールマガジン発信件数	0	
44	フェイスブック発信件数	0	
45	その他電子媒体発信件数	0	
46	職場研修開催件数	7	
47	安全衛生委員会等開催件数	12	
48	機器設備の点検状況	随時	
49	その他職場研修	随時	
50	グリーン購入の金額	1,182千円	
51	視察・見学者の受入件数	13	
51	視察・見学者の受入人数	175	

注) 調査対象外の項目は除いた。
会議等の開催件数にはweb開催やメール会議となったものを含む。

本年報に記載した内容の無断転載、二次利用は固くお断りします。

令和5年度 上川農業試験場年報

令和6（2024）年10月発行

地方独立行政法人北海道立総合研究機構
農業研究本部上川農業試験場

〒078-0397 北海道上川郡比布町南1線5号

TEL 0166-85-2200 Fax 0166-85-4111 E-mail: kamikawa-agri@hro.or.jp